

関山

かんざん

第18号



寺報 中尊寺

目次

寺報 グラビア

大切なころ―四無量心 貫首 山田 俊和 6

本堂釈迦如来像開眼によせて―

丈六仏に想う 佐々木邦世 9

第10回みちのく二夜庵俳句大会―講演(抜粋)

「震災と俳句」 講師 照井 翠 15

金色堂の照明 破石 澄元 25

秘仏御開帳に侍して 破石 晋照 28

金輪さまを描き続けて 山本 睦子 30

金輪さんにお会いして 佐々木恵一 32

関山植物誌(4) 破石 晋照 35

まち・ひと 平泉とあなたと月見坂と 矢部真希子 36

風信・語録 39

文化財だより 40

新刊紹介 41

仏教文化研究所／報告 42

〔福聚教会・中尊寺支部便り〕

積みあげてきたもの 破石 貞子 44

関山句囊・歌籠 45

陸奥教区宗務所報

御神事能番組 57

本尊造立結縁浄財寄進 御芳名

御奉納者 御芳名 58

浄財御奉納者 御芳名 62

不動尊篤信御奉納者 御芳名 63

東日本大震災御支援者 御芳名 65

東日本大震災支援活動報告 67

執務日誌抄 71

〈表紙〉

平泉諸寺参詣曼荼羅図部分



本堂新本尊丈六釈迦如来坐像



LED照明に浮かび上がる金色堂（東芝グループ御寄贈）（本文25ページ参照）

東日本大震災復興祈願
世界遺産登録記念
秘佛御開帳
（平成24年7月17日～11月11日）



開闢法要（平成24年7月17日）



宝相華唐草文透彫五智宝冠（一字金輪佛所用）



東日本大震災物故者慰霊月命日法要
（平成24年9月11日 陸前高田市小友地区の方々が参列）



ユネスコ事務局長来山
(平成24年2月14日)



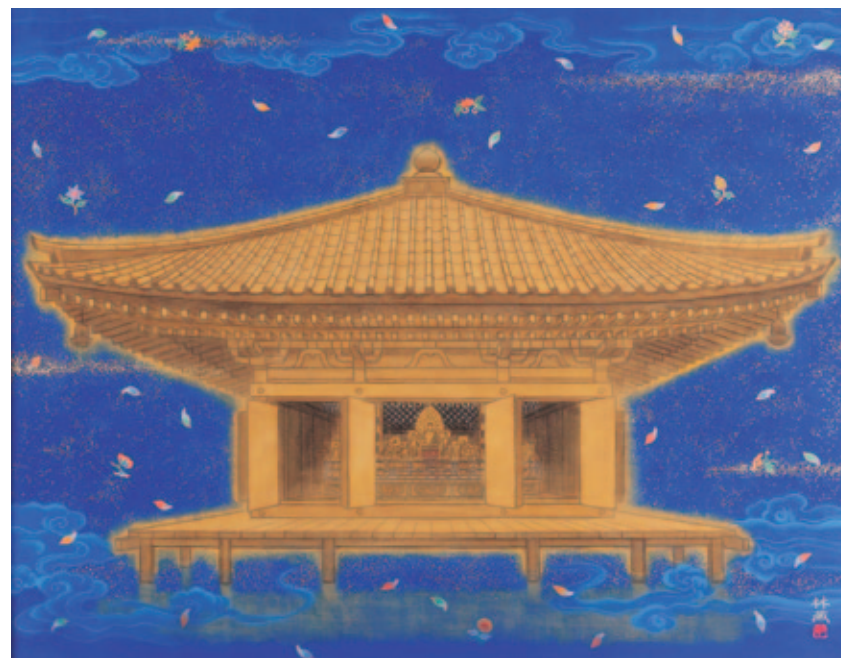
薩摩琵琶奉納演奏
(平成24年9月26日 北原香菜子師)



「金色堂中央壇上諸仏 三軀」(西陣美術織工房・盛岡(株)川徳御奉納)



世界文化遺産中尊寺と平泉の文化展
(平成24年9月26日～10月8日 熊本市鶴屋百貨店)



「散華心象図」(村田林藏画伯御奉納)

大切なこころー四無量心

貫首 山田俊和

「慈・悲・喜・捨」を、「四無量心」、または、「四等心」「四梵行」と言います。

この四無量心は、仏道修行を志す者が、必ず得なければならぬ、四つの大切な、大きな心で、法華経など、多くの経典に説かれています。

四無量心の、「慈」は、生きとし生けるものを、慈しみ、限りなく樂を与えること。「悲」は、哀れみの心を持って、人々の苦しみや悲しみを取り除くこと。「喜」は、人々を喜ばせることで、他人が樂を得るのを見て、喜びの心を得ること。「捨」は、全てのものに対して、分け隔てなく、平等な心の状態にあること、と言う意味です。

また、「慈」は、貪る心を断ち、「悲」は、瞋りの心を断ち、「喜」は、苦しみの心を断ち、「捨」は、愛憎などがなくなり、平静な状態になることです。

この四無量心こそ、無量の福德を得るための大切な心であり、平和で幸福な世界に至る、最も身近な道です。

藤原清衡公は、深く仏道を信奉し、この四無量心を得られて『中尊寺建立供養願文』に、「拔苦与

楽普皆平等……」の言葉を残されています。

四無量心と布施行

平成二十五年三月十一日は、東日本大震災物故者の三回忌です。亡くなられた方、御身内の苦悩は言うに及ばず、被災者の負った傷は、計り知れません。復興は思うにまかせず、再生には、多くの時間と予算を必要とします。あせらずに、一步一步、確かに歩みたいものです。

この大震災には、我が国ばかりでなく、世界中の人々が、犠牲者を悼み、被災者に寄り添い、悲しみや苦しみを共有し、物心両面に渡って、救援の手を差し伸べています。

その尊い救援の行為は、国家、民族、宗教など、主義主張が違っても、人として持つて生れた、善心が開化したものです。その心は、大いなる四無量心が溢れ出たもので、誰もが、どうにもならない自然災害に遭遇して、知らず知らずのうちに、観音さまやお地藏さまのように、それぞれの立場で、「慈・悲・喜・捨」の四無量心を実践していたのです。

この四無量心から溢れ出た、一人一人の行為は、どれをとっても、尊い「布施行」です。人々はみな、食物や衣類等々の財物をもって、被災者を助け、苦しみや悲しみの中にある人々に寄り添って、慰め励まし、誰もが、復興のため、出来得る限りのことをしています。布施は、悟りの岸に至るための修行である「六波羅密」の第一番目にある徳行で、財物や正しい教えをほどこし、おそれや危難を取り除くことです。

今は、世界各地に、紛争、難民、飢餓、疫病、自然災害、環境、食料、エネルギー等々、人類存亡にかかわる問題があります。私達が願う、平和で幸福な世界を得るためには、共に四無量心を育くみ、継承し、慈悲の心をもって和合しなければなりません。

私達は何をして来たのか、いま何をしているのか、これから何をしなければならないのか、全ては、私達の心にあります。



本堂釈迦如来像開眼によせて――

丈六仏に想う

佐々木 邦世

み仏に美しきかな冬の塵 細見綾子

この句は、奈良の唐招提寺金堂の本尊・盧舎那ろしゃな仏坐像の台座の蓮弁に、塵がうつすらと積もっていた。それを「美しきかな」と詠んでいる。昭和十三年。冬のある日、古代の気配を濃く留める金堂内に佇つて、眼前の本尊の塵も尊く美しとうけとめた作者の心がうかがわれる。

この盧舎那仏の像は、脱活乾漆造りで像高三尺を越す。表情も、両肘の位置を低くした構えも、ゆったりとした趣きのある、天平の御仏である。

それから十年後、昭和二十三年九月。東北の岩手県、ことにも一関・平泉のあたりは、アイオン

台風の豪雨で北上川下流域あちこちの堤防が決壊して大洪水になった。前年のカスリン台風と、二年続いての大水害であった。

中尊寺の本堂は、明治四十二年に再建されたものだが、屋根は木端葺きであった。戦中・戦後の疲弊した状況からして、寺の大屋根の葺替えなどできる状態でなかったから、漏る雨の量も半端でなかった。御本尊の丈六仏の大きく組まれた脚膝にも、雨が降るたびに三合ほどの雨水が溜まった。台風になれば一升以上にもなったナ、と後々、お年寄り方が語っていた。冬日に映る塵は美しくとも、一升を越す漏水が溜まっていたは――。まさに戦後の何処も貧しかった時代である。

本堂の丈六仏は、平安時代後期の阿弥陀如来坐像で、昭和三十年に宝物収蔵施設讚衡蔵が建設成つて、以来、そちらに遷して保存、安置されている。丈六仏三体が並んでいて、隣の黒漆の薬師如来と共に、本来この二尊は麓の光勝院の本尊像であった。

ともかくも、私が中学に上がったころまでは、

本堂に入ればそこに大きな御姿が見えたわけである。そもそも、本堂を建てるときに、この丈六さんを本尊とするところから、内陣の高さ・間口の寸法をとったものであった。

正面の大戸は日中は開け放たれていたから、人も風も、たまには雀や蝶も自由に舞込める本堂だった。

□

中尊寺の本堂は、当初から平泉における文化講演会等の会場になってきた。大正四年八月の歴史地理学会講演には、辻善之助博士が来られた。「平安朝仏教史上に於ける中尊寺の地位」はその際の講演の稿を起したもので、翌年発行の『奥羽沿革史論』に掲載され、そしてそれに寄せられた和田英松さんの質問から、奥州藤原氏の藤原姓について、清衡の父が「藤原経清」を名乗った時期が想定より大分遡ることがわかり、後日、博士が訂正文を追記している。そういう学術的な機縁にもなった。

その日の、寺の「日誌」には、「世の中に、こ

れほど多くの人がゐたとは」と筆で書き込んでいる。ふざけた記述ではない。当時、東北の一寒村に過ぎなかった平泉に住んで、日常は電話もカメラも手にすることさえ少なかっただろう、年老いた僧の素直な驚きであったと思う。辻博士の高説を聴かんと、この地方の人士が白扇を手に大勢本堂に座した様が見えるようである。

戦後の中尊寺の大きな事業にかかわる法要は、当然、本堂で執行されてきたわけで、思えば、その一コマ一コマがあつた丈六仏の前に甦ってくる。

昭和二十五年三月三十一日、藤原四代御遺体学術調査が終了して、本堂内陣両脇の格子扉のなかに三体の棺と一個の首級桶が収められた。十一月までの仮安置である。日暮れて六時過ぎ、正面の大戸が十日ぶりに開けられた。それから調査終了奉告の法要がはじまった。

「徒らに御尊骸を驚かし奉り……」

蘭実円貫主の表白文に、だれもが心耳を傾けていた。



御本尊の前机には、一度鎌倉に戻った大仏次郎氏が、この日、持参した早咲きの桜が満開だった。
(調査日記)

その年の六月二十四日、芭蕉祭全国俳句大会を開催。選者に山口青郵氏と阿部みどり女氏を招へいしている。青郵は回想録のなかで、こんなふう

に記している。
本坊に着いて、私は書院に通された。今日のためにかねて募集してある千数百句の選をしなければならなかった。本堂では芭蕉追善法要が行はれてをり、読経の声が潮騒しおさぎのやうに聞えて来た。私も参列したいのだが、選句のために出来ない。私は時々句稿の眼を庭にそらした。雨はなほ降りつづいてゐる。

十歳ぐらゐの雛僧が二人、こそこそと来て、私の部屋をのぞいて去る。書院にお客があるといふが、どんなお客か、一つのぞいて来ようと、二人で忍び足で来た——といふやうな様子だった。

(記念講演にひき続いて) 句会は、大変な人数で、句数も多く、七時までかかった。

(八時頃に夕食の席があつて、それからもう一句会やりたいといわれ)縁側に端居して、真闇な庭に向つて句想にふけた。降つておると思つてゐた雨ははれて月が出る気配がした。

本堂の阿弥陀如来は句会の席からの燈火に光らされて、まことに荘厳に見えた。(『回想の南瓜』)

そしてこの日詠まれたのが、

沙彌ふたりわが部屋のぞく梅雨の坊 青邨
である。

こうして、よく夏になると平泉文化講演会とかいった催しがあつて、当時、平泉に疎開されていた歴史家・津田左右吉先生のお話とか、東博館長の講演などには聴講者の白いシャツで本堂がいっぱいだったのを憶えている。

丈六の御本尊も大きな耳で、俳人や歴史家、こうした碩学せきがくの講演を聴かれていたわけである。

「丈六」とは、身のたけ一丈六尺の仏像、坐像はその半分で半丈六と。中国の周時代に用いられた周尺では人の身長を八尺として、その倍尺でもつて釈尊のすぐれて尊い、仏身を現したわけである。『日本書紀』(欽明紀)に、「願文を製して曰く、けだし聞く、丈六仏を造りたてまつる功德甚大なり」とある。

中尊寺に遺存する三体の丈六の法量は、阿弥陀如来坐像が二六七cm、峯薬師坐像が二六六cm、黒漆の闍伽薬師が二七五cm。

この度開眼なる、新造の釈迦如来坐像も二七五cmである。

ちなみに、彼の平等院鳳凰堂の阿弥陀如来坐像(天喜元年/1053)は二七八cm、京都大秦うずまさの広隆寺講堂の阿弥陀坐像(承和七年/840)は二六一cmである。□

奥州藤原氏初代清衡によつて、この山上に堂塔伽藍が建立された当時の中尊寺の主尊仏は、『供養願文』に

建立供養し奉る、鎮護国家大伽藍一区のこと
安置し奉る、丈六皆金色の釈迦三尊像

とあり、「仏像は蓮眼葉れんげんか、紫磨しま金色なり」と記している。また、三重の塔には「摩訶毘盧遮那如来を安置し奉る」とも陳べている。さらに『吾妻鏡』文治五年(1189)の「寺塔已下注文」には、中尊寺の「寺院の中央に多宝寺(塔)あり。釈迦・多宝像を左右に安置す」と、また「釈迦堂には一百余体の金容、すなわち釈迦像なり」とあつて、中尊寺は、釈迦尊像が支柱たる寺観を呈していたととれる。それが鎌倉時代には、すでに無本尊の堂で御祈祷もし、憚りはばかありといった状況を書いている。

丈六の釈迦如来坐像は、中尊寺一山の宿願であつた。今回、幸いにも機熟して造像の話が具体化するなかで、どのような手の形(印相)が好いか話し合った。これは清衡が願文に、全奥羽の地を「界内の仏土」となさんと陳べ、「この娑婆の辺土そのまま、全奥羽の地を仏国土(浄土)にな

さん」と願われた素意を汲んで、転法輪印(説法印)が至当ということ、一山の思いは一致した。が、説法印も手の向きや形が一樣ではなかった。奈良の室生寺弥勒堂に、別な所から移されて来た、客仏の釈迦如来坐像が在すが、それに見られるように、右手は肘を曲げて前に出し、掌を正面に向けて開く(施無畏印)。左手は膝に安んじ、指を開いて掌を上に向ける(与願印)。これが、釈迦の転法輪印として一般的に知られている。けれども、「中尊寺経」といわれる紺紙金銀字交書経や金字経の見返し絵には、左手が甲を正面にむけている図が目につく。この形は、大陸風の印相として、法隆寺旧壁画六号壁の阿弥陀如来像などをあげて解説しているものを見た。

中尊寺本堂に入る新たな本尊・丈六の釈迦如来は、この左手が甲を正面に向けた転法輪印(説法印)である。

さて、釈迦如来といひ阿弥陀如来といひ、大日如来といひ、どう解したらいいものか。京の流行

歌「今様」を後白河院が編んだ『梁塵秘抄』に、こんな歌があった。

ほとけはさまざまにいませども

まことは一仏なりとかや

薬師も弥陀も釈迦 弥勒も

さながら大日とこそきけ

「さながら」とは、「そのまま」の意である。

そこで、前貫首・多田厚隆師の講話を紹介しておこう。

『法華経』の久遠実成の仏であり靈山浄土の主たる釈迦如来は、また密教の教主大日如来と二仏一体の法身であり、それは西方浄土の阿弥陀如来に異なるものではありませんから、弥陀の浄土も現世十方に在るわけです。諸仏諸菩薩も久遠の本体（本地）の応化であって、真実というものは一体であります。諸仏は個々別体のように見えますけれども、人の心が異なるように、それぞれに相応する姿に化現したものでありますから、ここに融通無碍な仏身を包含する一仏世界が顕現された、娑婆の辺土即寂光浄土

と、そう受けとめることができます。

釈迦は、密教の大日如来と一体であり、毘盧遮那如来と別なるものでもない。釈迦の慈悲の法体（本質）が姿になったのが阿弥陀如来、そういうことなのである。

以前の、丈六の阿弥陀如来は、昭和とともに生きていた感じがする。新しい、丈六の釈迦如来像には、東北の今を、若いひとたちのこれからを、其処に在（お）わして、共に生きてほしいものである。拝む、こちらの気持ち、心のあり方の問題である。

（中尊寺仏教文化研究所長）

第10回みちのく二夜庵俳句大会——講演（抜粋）

「震災と俳句」

講師 照井 翠

〔先程お配りいただいた資料は、俳句雑誌『澤』（主宰・小澤實）の依頼で書かせていただいた原稿を少々手直ししたものでございます〕

東日本大震災。（平成23年）3月11日、午後2時46分。私は釜石高校に勤めておりますので、あの時、翌日大学を受験する生徒の小論文を指導しております、「さあ、終わったね。明日は受験に行つてらっしゃい」と、ポンと肩を叩いた。その瞬間からとんでもない、全てが一変したのです。地鳴りが、すごい地響きというのでしょうか、ものすごい。何が起きたんだろうと、もう、とにかく恐ろしくて、今でも耳に蘇るような地鳴り、地響きが、足の下からざーっと来たかと思つたら、

ものすごい揺れがきました。もちろん立っていられないほどの揺れでした。そして、自分がいたフロアの、床のタイルとタイルの継ぎ目が、全部V字型になって、山のようになりました。地震の圧力でタイルがバツとめくれ上がって、VとVの字に……。

生徒と一緒に大きなテーブルの下に隠れました。が、こうしてはいられないと思つて職員室に行つたら職員室もパニックです。先生方も、もう腰を低くして這いつくばっていらつしましたね。そして、校長先生のご判断を伺いまして、生徒は速やかに校庭に避難しなさいということ、そこから、避難のはじまりでした。

一番揺れがひどかったのは五階でした。生徒はもう怯えて怯えて、それはもう大変な有りさまでした。何とか助けながら校庭に避難したら、雪がちらついてきました……。浜から来ている生徒たちがたくさんいましたから、今日はもう帰れない、学校に全員泊まるんだという気構えになりました。それで体育館にいろいろ運べるものを運ぼう

ということ、ラグビー部の生徒が合宿所から布団を運んだり、空手部の子が道場から畳を運んだり、みんなテキパキと動いてくれました。そうしている間に、今度は地域の一般の方々が、とても怖くて家にいられないので体育館に身を寄せさせてくださいということで、たくさんの方々が避難していらつしましたね。余震もひどく、とても家になどいられない、家が壊れそうで危ないというのです。生徒自体は四〇〇人弱でしたけれども、そこに一般の方も数十人、一〇〇人、最終的にはもう、何百人だったでしょうか。そういうところからスタートいたしました。

実は、うちの高校で、両親を亡くした生徒が四名、どちらかが亡くなって片親となった生徒が一六人も出てしまいました。その他、弟や妹を亡くしたり、おじいさん、おばあさん、おじさん、おばさんを亡くした生徒が、沢山いました。家族は助かったとしても、家屋が流失して、全財産を失ってしまった生徒が大勢いました。

あの後、しばらくしてから、北隣の大槌町の方

へ行きましたが、本当に何も残っていないんですよ。大槌・吉里吉里とか、あるいは南の方の唐丹とか白浜とか、そちらから優秀な生徒さんが来ている学校ですので、その生徒たちはもう家には帰れない。帰れないどころか、親や兄弟が命を落としているということでした。

避難所となった体育館で、ラジオを囲んでみんなで膝を抱えて座っているんですけども、津波被害の想像もできない数字を聴かされるわけです。「町が壊滅って、先生、何のことですか」と、生徒が私に尋ねてきます。壊滅の意味は知っていますんですけども、どうしても受け入れられないのです。「山田町壊滅ってどういうことですか、先生」、もう本当に大変でした。

その夜中、2時、3時、4時になって、親御さんが泥だらけの疲れきった様子で「うちの子いますか」といらつしゃって、「何々君、お父さんいらしたよ」と引き合わせると、「家が流された」、「今までずっとお母さんを捜したけれども、どうして

も見つからない」と言っって息子の肩を抱きしめました。思い出すと私も涙が出てしまうんですけれど、そこで無言で抱き合っって、抱きしめ合っって、ただ涙を流していました。そしてその後、その生徒はお父さんと一緒に眠りたいと言いまして、実は布団もなかったのですが、生徒はお父さんのもとで一晩寝ていましたね。それからもう、お父様も行くところがなくなっちゃったので、うちの学校で避難所生活をなさっていました。そういうところから、スタートいたしました。

その後、私は、あるご縁によりインドに行くことになりました。インドの詩人の方々にお会いしたのですが、すごく心の深い方々で、震災の後、インド国内の詩人の方々が集まっって、日本の鎮魂のための詩の会を開いているんですね。そして今度、ぜひ日本から詩人の方々をお呼びしたいということ、私どもが招かれました。俳人2名、詩人1名、歌人2名、ミュージシャン1名の計6名は、主に東北の方々に、盛岡大学学長の望月先

生がリーダーでした。インドの方々は本当に心から祈りを捧げてくださいました。ヒンズー教徒の方々が主でしたけれども、深い鎮魂の祈りでした。その時にこんな句を朗読してきましたんですね。

双子なら同じ死顔桃の花

照井 翠

春昼の冷蔵庫より黒き汁

しら梅の泥を破りて咲きにけり

釜石はコルカタ 指より太き蠅

なぜ生きるこれだけ神に叱られて

こういった句を含めた30句を、通訳の方がちゃんと訳してくださいって、そして泣いてくださった方もいましたね。インドでそういうふうなことをしてまいりました。

さて、今日の講演のテーマは、

「震災によって俳句はどんな影響を受けたのか」です。このことについて、次の三点に分けて考え

てみました。最初に結論から申しますと、

1、俳句形式に関しては特に影響を受けなかった。
例えば、五・七・五とか、そういったベースの部分に関しては影響はない。ただし、

2、季語については、脈々と受け継がれてきた伝統的〈本意〉、その本質ですね、その世界が押し広げられ、そして、より豊かになった。
例えば、秋の風という季語があれば、秋の風というのはどういう本意を持っているかと。また、無季の俳句、私も今回、無季俳句をずいぶん作っているんですけども、無季の選択について真摯に検討がなされたということです。

3、震災による詠み手の人生観、世界観の変化・深化に伴い、俳句に詠まれる内容も大きく変わった。と同時に、読者による俳句の読まれ方も震災の多大な影響を受けて深まった。

このようにまず、私としては論を立ててみたんですね。

先ほども申し上げましたけれども、釜石は非常に深刻な被害を受けましたが、去年の11月でしたか、ある生徒が学校に電話をかけてきました。「先生、明日学校を休みます」と。そこで私は「学校を休むというのはどういうことですか。何とか出ていらっしゃい」と言ったところ、「実は先生…、昨日、警察から電話があつて…お父さんが両石湾で浮かんでいるところを漁師さんが見つけて引き揚げてくれて…。それで明日、お父さんの遺体検視の立ち会いに行くんです…」ということでした。それで先生休ませてくださいと。

ですから、もうほとんど震災のことを忘れかけているというか、忘れよう、忘れたいと思つていた11月末か12月でしたかね、その頃にまだ、生徒の親御さんがこのように海に上がってきたりする。ですから、まだ何も終わっていないし、何一つ癒されないといいですか、そして、まだ何も始

まっていない、いまだ渦中にある、そんな感じすらするわけです。

そういった、様々な無念の死というものが釜石で、私が暮らす中でもあつたわけですね。本当に突然の死だつたと思います。朝「行ってくるよ」と言つてね、それが永遠の別れということでございます。

そういうことで、我々民族の記憶に永久に刻まれるような大震災に遭遇して、全てのもの・ことに対する私たちの、まさに人生観、世界観、宇宙観、全て根底から見直されることになりました。

自然とは何か、人間とは何か、生きるとは、死ぬとは何か。自分たちを取り巻く自然に対する根本的な問いかけは非常に深まったと思います。一人一人の心に根みたいなものがあつて、その根が非常に深いものになったと思います。

それで、以上3点述べたうちの、2と3について、お話しいたします。

震災後の季語に関する考察、貴重な指摘を資料にあげておきました。(平成24年1月号『短歌』「短

詩型文学の未来」という鼎談があつたんですね。3人の著名な方々で随分有意義なディスカッションをなさつた。その時に片山由美子さんが、

車にも仰臥という死春の月 高野ムツオ

という句について、「ここに『春寒し』『冴返る』といった季語を置いたのでは事実を説明しているだけで、季語が働かない」と、そういう分析をなさっております。この指摘自体がもう深いものを感じますけれども「車の仰臥」、まさに仰向けで、あるいは転がったり、もういろんなことをこの言葉から私たちは想像します。「車の死」です。そして、そこにあの美しい春の月が昇ってくる。それで高野氏は「春の月」という季語を置いた、句になさつたんだろうと分析しています。

そしてこの高野氏の句は、「春の月」という季語の伝統的な〈本意〉を押し広げたと指摘しています。「春の月」というと、遙か千年以上も前から、非常に美しいものの典型ですよ。おぼろ月夜で

あったり、あるいは、春の霞の向こうから上がってくるようなぼつたりとした赤い月、命そのものですよね、春の月とは。

その、「春の月」という季語の世界観を広げたというんですね、この高野さんの句は。

ちなみに、私は、何かの雑誌にも書いたんですが、この震災の夜はとても空が澄みきっていて、夜空に、満天の星でしたね。そして、私の記憶違いでなければほぼ三日月といえますか、月は細かったと思います。

私も、いろんなところで、世界中を旅して、タンザニアとかケニアとかネパールとか、そういうところを歩いたりしているんですけども、ああいったところは満天の星なんです。ところが、この時、釜石で見上げた星以上の星を見たことがあります。我が生涯、もしかしたら最高の星の夜、そしてそこに鋭利な刃物のような月が輝いていました。そして、非常に寒かったです。連日のように雪が降り、ずいぶん現実には厳しいものだな

と思ったものでございました。

さて、鼎談に戻ります。拙句の

双子なら同じ死顔桃の花

について、片山先生にお取り上げいただきまして、『桃の節句』など、女の子の成長の象徴である桃の花が、死のときに出てきた」と指摘したのに対し、栗木氏は『桃の花』が鎮魂、手向けの花になってます。小池氏は「季語ってそういうときにすぐ強く働くんですね」と応じ、片山氏は「わずか五七五の中で季語がそういう働きをするところに、俳句の力が見直されていると思います」とまとめていただきました。

この片山氏の論は、震災を詠んだ俳句を分析し、季語の働きの新たな可能性について言及したものとして注目されました。

あの震災の直前、3月3日に私は、遠野の町家のひな祭りを見て歩きました。お菓子屋さんで雛

あられなどを買い求め、少し浮かれた気分です遠野の町家を歩きながら、お雛様をいくつも見て回りました。桃の花は、実際には、釜石ではまだ咲いていませんが、お部屋にはひな祭りで飾った名残の桃の花もあつたと思います。この句の「双子」というのは、作者の想いとしては桃の花と照らし合わせますと「姉妹」となります。

今回の大震災では、春という草木が芽吹き命躍動する季節の中、まるでその反対方向に引き裂かれるかのように、死の方に自然災害が働いてしまった。しかし、春ですからどうしても命の躍動の季語しかないんですね。その中で、一つの季語を選択するんですけども、それが私の句の場合は「桃の花」と置くことで逆に非常に心が揺さぶられるといえますか、まったくもって本当に言葉を失ってしまうようなむごたらしい世界、一句の世界が、巧まずしてそういう一つの句の世界ができてしまったんですね。もしも夏や冬にこの震災が起きていたら、さあ、どんな句ができていた

のか。また全然違う世界があるんでしょうね。そう思います。

いずれ、片山先生のご指摘は、季語の働きとその新たな可能性について言及なさったということだと思います。ということで、季語の本意、これは大きく揺らぎはしない、しかし、その季語を用いる側の主体である我々人間、俳人の方が、こんな世界観、人生観、宇宙観、自然観、全て根底から変わった以上、当然季語に対する見方、季語の深め方、季語の掘り下げ方というのはもちろん、より深くなつたと思います。

そして、多分、季語の世界観を深める方法、季語の働きをより意識する、そして季語の持つ世界の奥深さを再認識する、そういうことが、皆さんそれぞれの中で起こっていると思います。

次に、無季の俳句について、見てみます。

瓦礫の石抛る瓦礫に当たるのみ 高柳克弘

まさに、無機質な句です。びっくりしますね。

何といたしますか、これはもう季語とか何とかという議論を差し挟む余地がないんですね。この句は非常にいい句だと思います。俳句ですから、やはり季語があった方が、もちろんいいのかもしれませんが、しかし、やむにやまれず、こういう句が生まれるということもまた事実なんですよ。

私自身も、震災をモチーフにして無季の句をたくさん詠んでいます。自然に、無季になってしまったということもあります。あるいはあえて季語を探したり、ここでの季語は何だろうという思考、考え方にいかなかった部分もあります。とにかく、この未曾有の大震災で自分の周りが本当に大変な状況、生徒も家を失ってこの避難所を出ていけないんだと。そういう中で、私も自分のアパートを見にいった時にとんでもない、潮の餼えた臭いとか油の臭い、そこをとぼとぼ肩を落として歩く人たち。津波へド口で覆われた釜石の町、そういう荒涼とした中で季語を探すということはとても難しかったです。ですから、こういう句もあるんだ

なという感じがします。こればかりでグイグイ押す気は私にはありませんが、こういう無季の句も成立し得る、そういう未曾有の震災だったということなんです。この句は無季である方がいいと、そう作者が判断する句もあるんだと思います。

最後に、3の、俳句に詠まれる内容が震災から受けた影響について考えてみました。と言っても、ここで私が取り上げたいのは、震災をモチーフにして詠んではないが、震災の影響の認められる俳句についてであります。

『俳句』（平成23年）5月号から引きました。

四五本の野梅に鬱のはじまりぬ 石田郷子
はこべらの冷たさに手を置きにけり

ものをじっくりと見た、穏やかな調べの句ですね。作者が意識するしないに関わらず、作品のなかに、鎮魂や祈りの思いが自ずと滲みでてくるものと推測されます。へいのちへに寄せる石田氏の

眼差しには、震災以前のそれとは違う、日常に対する漠然とした不安感や、鎮魂の思いが滲んでいるように感じるのは、私のただの深読みでしょうか。そして、

石上に置く透明な夏帽子

宇多喜代子

「透明な夏帽子」、この言葉の喚起するイメージは……、私はただもうこの一句の前で立ち止まってしまいました。透明な夏帽子って何だろう、そうするとこれは、例えばですよ、あの石巻の大川小学校ですか、非常にたくさんの方が亡くなった。そこに読みを限定する必要はないですが、仮にあそこを思い浮かべたらどうなるでしょうか。石の上に置く透明な夏帽子、透明です、見えないんですね。けれども、作者はそこに夏帽子を見ているんです。触れられないし見えもしない。しかし、見えないが見えるんです、作者には。そこに震災で亡くなった、例えば小学生らの帽子。あれから何カ月かしたら夏が来て、被っていたかもし

れない帽子。しかし、それは……。詩や短歌に比べて俳句のように短ければ短いほど、ある意味、有利だとすら言えると思います。短いからこそ、その言葉が喚起する、一つのフレーズが喚起するイメージというものは、無限だと思えます。何も俳句表現のスケールを小さくする必要はないと思えます。小さくどころか、小さく詠んでいそうに見える、この「透明な夏帽子」という五・七・五の半分を使っている、この表現、この比喩によって、俳句の無限な可能性を示している、そういう一句だと思えます。

俳人として、言葉を持つものとして、どう震災に向き合うべきか、どう俳句に向き合うべきか、今こそ真価が問われています。俳句を詠む人とは、俳句作品を通してしか自分の想いとか自分の世界を他者に提示することができないと思います。大きく言うと、哲学は俳句でしか表現できません。世界って何だろう、自然って、人間って、生きるって、死ぬって、家族って何だろうとか。そういう

ことに気付く、無限の器なんです、俳句は。言葉
を弄したり、過度に整えたりするのは、場合によっ
ては死者への冒瀆ぼうとくになるのではないか、そうなる
可能性があることに配慮しながら、言葉を自分の
魂のレベルでちゃんと濾過して、フィルターにか
けて、私はやっぱりこの言葉を使おう、と。舌頭
千転という言葉がありますけれども、それくらい
の気持ちで見直して、これだというものを詠み、
発表する。それが、震災で亡くなった方へのせめ
てもの手向けだと思います。

ご清聴ありがとうございます。

(今日の照井翠先生のお話、一関における、将来に残
るご講演だったと思います。お話の一つ一つが我々の
中で考えさせられるもので、ありがとうございます)

プロフィール

照井 翠(てるい みどり)

一九六二年岩手県花巻市生まれ。俳人。

一九九〇年より加藤楸椰に師事。俳誌「寒雷」草

笛」同人。現代俳句協会会員。日本文藝家協会会員。

二〇〇二年、第二十回現代俳句新人賞受賞。句集

に『針の峰』『水恋宮』『翡翠楼』『雪浄土』『龍宮』。

高校国語科教諭。現在、釜石市在住。

(一関俳句協会の御承諾、ご協力をいただきました)

金色堂の照明

破 石 澄 元

金色堂は、昭和三十七年から四十三年まで昭和の大修理
が行われ、その際に施設された蛍光灯によって照明されて
いた。その間、昭和六十三年から平成元年にかけて、照度
分布など調査して、器具の増設や設置位置を変更して改善
の努力をしてきた。しかしながら、蛍光灯主体の平坦な照
明で、金色堂の美しさを参拝の方々にご理解をいただける
には、今の時点で考えれば、不十分なものであった。大修
理以前はどうなっていたかという点、私は、外部から裸電
球を引き込んで、薄暗い中でお勤めをしていたように記憶
している。

従前の照明について、いくつかの懸念があった。大きな
ところでは、照明器具がかなりの熱を発生していること。器
具の設置が不安定なこと。器具から放出される紫外線のこ
となどであり、金の発色、螺鈿の輝きをはじめ、繊細な工
芸技術が感じられないことであった。平成二十二年には、

大手家電メーカーに相談して、LEDによる照明の設計を
してもらった。設計は詳細にわたっていたが、今ひとつしつ
くりしないものがあつた。たしかに、問題の一つ二つは解
消されるものであつた。しかし、特に照明によって演出し
ようとするものではないが、平坦な照明になってしまうと感
じ、つまり、蛍光灯をLEDに換えるだけで視覚的にはあ
まり変化がなく物足りなさを感じていた。保存管理上、金
色堂の詳細を観察してきて、その美しさのようなものを参
拝の方々に深く見ていただきたいと考えると満足でき
るものではなかつた。

東日本大震災が発生した翌月、四月七日の余震で危惧さ
れていたことの一つ、金色堂内部に不安定に取り付けられ
ていた蛍光灯が、器具ごと落下した。幸い、建物本体に損
傷を与えなかつたが、余震が続く中でいつも不安を抱いて
いた。

平成二十四年五月、株式会社東芝から、LED照明器具
による金色堂の照明改修のお話をいただいた。大変ありが
たい話ではあつたが、問題は器具交換だけで、工事的なこ
とは不可能ということであつた。金色堂本体はもちろん、

覆堂に対しても傷をつけられない。配線も現状どおりという条件でどのようなことができるのか検討していただいた。また、金の発色、螺鈿の輝き、金工の精緻などを視覚的に感じる事ができるものかどうか。あるいは、金色堂に傷をつけずに器具を安定的に固定する方法があるかどうかなど、いままでの問題点を限りなくあげさせていただいた。その後証明デザイナーを加えた東芝グループの方々が足繁く金色堂に來られ、事細かに調査研究を繰り返していた。その内容は、

一 金色堂における光環境の在り方の研究、輝度を用いた
明暗のバランスの検討

二 CGシミュレーションを活用したイメージによる相対
評価と輝度による絶対評価

三 鏡面やルーバを用いたきめ細かい配光制御、計測と現
場実験による被照物に適した色温度と分光分布の検討

四 躯体を傷つけずに地震にも強い施行の実施
などであった。その結果として照明の設計がなされ、特注
器具の製作なども順調に進められた。その間、金色堂で消
費する電力量相当以上の発電する太陽光発電システムが、



讃衡蔵に付属する売店屋根上に設置された。

九月中旬になって、金色堂の照明改修工事が施工された。現場の工期は約一週間。参加者が去った後の、十七時からの作業であった。拝観者スペースの部分から施行され、徐々にスクリーン内、金色堂本体の内部へと作業が進められた。スクリーン内部、金色堂の養生に多くの労力を費やすとともに、作業員を最小限に絞って工事は進められた。普段でもスクリーンの内部に入るときは緊張するものであるが、器具交換のような簡単な工事といってもやはり相当に緊張させられた。事前に十分調査をしていたことと、特注の器具のおさまりがよく、固定の方法なども無理なくできた。

九月二十二日朝八時、株式会社東芝代表取締役社長の佐々木様はじめ、関係者・来賓をお迎えして点灯式が行われた。金や螺鈿の輝き、蒔絵の様子、須弥壇の孔雀の羽毛までも見えるように感じられた。三つの須弥壇、その上の仏像群の見え方が変わった。照明によって金色堂自体、従来に増して立体感が強調されたように見える。さらに正面からの光源も目に入らない。これも今回の改修の大きな成果であろう。

今回の照明改修工事によって、金色堂の本来の輝きに一歩近づいたといえる。株式会社東芝・関連企業の皆様・施工等ご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

(二山金剛院 住職)

秘仏御開帳に侍して

破 石 晋 照

中尊寺の秘仏「一字金輪仏頂尊」は平安時代末期の作で、像高七十六センチの小像ながら、桂材を大きくは四段に積み重ねた寄木造になっています。眼には水晶を嵌入、朱唇、頬には紅をさし、世に「人肌の大日如来」と親しまれている尊像です。江戸時代の修理によって、首から下は胡粉彩色になっておりますが、金銅の装身具や光背・天蓋ともに当初の形で残っております。奥州藤原氏三代秀衡公の念持仏と伝えられており、その秀衡公を頼って平泉に身を寄せた悲劇の英雄源義経も間近に手を合わせたのではないのでしょうか。

平成二十四年、東日本大震災復興祈願、そして世界文化遺産登録を記念して、十二年ぶりに秘仏の御開帳が行われました。十二年前というと私はまだ学生でしたので、この御開帳に関わるのは初めてのことでした。今回私は御開帳の担当として、尊像のお側に侍し、お参りの方々にその説

明をさせていただくことになりました。不安と緊張を感じながらも、基本的なことの学習につとめ、お参りの方々をお迎えする準備に励みました。

七月十七日、御開帳は初日から大勢のお客様で賑わっていました。以前の御開帳に足を運ばれ、金輪さまの虜になり、この日を待ちかねて遠方から駆けつけていただいた方。あるいは金輪さまのことを見聞きし、思いを募らせ、初めてお参りいただいた方。大震災の被災地から何度も足を運ばれた方。御縁はさまざまですが、実に多くの方々が金輪さまに手を合わせる日々が続きました。

このたびの御開帳の会場は、旧讃衡蔵の奥にある秘仏室で行われました。普段はお客様が足を踏み入れることはないところですが。前室に用意したモニターで金輪さまの若干の説明が行われました。さらに進んで金輪さまの前に足が止まったとき、お客様の目は完全に金輪さまに釘付けになり、室内の空気が緊張します。張りつめた空気を壊すことに、いささか遠慮を感じながらも「仏様の説明を申し上げます」と切り出すと、お客様は現実の世界に引戻され、金輪さまから目をそらさないながらも、しばし説明に耳を傾

けていただきます。説明が終わると、またそれぞれに、あたかも金輪さまの世界に入っていくかのように、正面から側面から、あるいは尊像に近づいての祈りが続きました。

お参りの後、お客様のお顔は言葉にできないような独特の表情になります。優しさ、喜び、幸福、慈、愛、どの言葉も当てはまるような気がするのですが、どの言葉も少し足りません。しかし、金輪さまをお参りしたとき、私たちは何か共通の感覚、感動を心に持つことは確かだと思います。そしてその心が、言葉にできない表情を作り出しているに違いないと思います。

以前のご開帳の様子を調べるため、この寺報「関山」バックナンバー調べてみました。「関山」四号に中尊寺前貫首の千田孝信大僧正が次のようにお書きになっていました。

「一字金輪仏頂尊」の尊容に、参拝客は思わず息をのむ気配である。寺僧の静かな語り口に耳を傾けながらも、目は釘付けになったように、仏さまのお姿を離れない。不思議な魅力をもつ仏さまである。なぜか、長い間こころに求めていた尊い存在に巡りあえたような邂逅の感動がある。」

ご開帳の期間中、私が見ていたお客様のお顔は、まさしく故千田前貫首がお書きになられていたお顔でした。まるで長い間離ればなれになっていた家族や親友、恋人にそこで再会したかのような、あるいははずつと探し続けていた何かをここに来てやつと見つけることができたかのような、そんなお顔でお客様は金輪さまを見つめていたのでした。金輪さまはきつといつでも私たちにとつての、探し求めてきた「何か」なのだと思います。それは時空を超えてもなお、私たち手を合わせるものに共通して感動することができる普遍性をもった「何か」なのではないでしょうか。

「やさしいお顔ですねえ。」
「ぬくもりを感じますね。」

お客様は口々にそうおっしゃっていました。しかし金輪さまと対面し、手を合わせ、「何か」をそこに見つけたとき、実は手を合わせたその人自身のお顔が同じくらいやさしく、そしてぬくもりに満ちたお顔になっていました。

金輪さまを描き続けて

山本 睦子

藤原秀衡公の念持仏であり、中尊寺の秘仏である、一字金輪仏頂尊の麗しく気高い美しさに心打たれて、心未熟ながら写生を試みたのは、平成九年の御開帳が最初でした。

その後も、金輪仏への思慕は深まるばかりで、み仏の魅力に心奪われてしまった私は、平成十二年の御開帳の折に近くの毛越寺に宿をとり、開館から終日まで六日間、心ゆくまで写生をしました。毎朝、息を弾ませて月見坂を上って行く私は、み仏に恋をした少女の様でした。

毎日写生に通う中、多くの方から親切にしてくださいました。絵を描く暗い手元に、明かりをくださった秘仏の案内係の方々。冷えた体に温かいお茶をいただいたこともありました。

金輪さまに恋焦がれて、若い時分より、中尊寺

へ通い続けた一人の男性からは、同じ思いを抱く仲間に出会った嬉しさからか、彼が撮影したという昔の貴重な金輪仏の御写真を頂戴しました。すべては、み仏より頂いた大切な御縁です。金輪さまを描ける幸せと、心暖まる人との出会いに、心から感謝を捧げた写生の日々でした。

そして、平成二十四年の、世界遺産登録記念、東日本大震災復興祈願における御開帳が、三度目の写生となります。

『描く』という行為を通して、金輪仏の深遠な美しさの源を知りたいと思い、長い間、み仏のお姿を描いてまいりましたが、御仏が秘する魅力は、容易には語り尽くせません。

諸仏の徳を一身に集めた仏様であるにもかかわらず、高雅な官能美を具えておられます。その佇まいは、清澄な気品に満ちながらも、なぜか深い憂いを感じます。それは、かつて東北の民が辿った厳しい歴史と関わりがあるのかもしれない。荒ぶる心の波を鎮め、救いようのない悲しみに堪えながら、北の昔人は生きてきました。それは、

東日本大震災によってもたらされた苛酷な現実とも重なります。

しかし、明けない夜はないように、漆黒の闇の後には、東方より眩いばかりの陽が昇るように、金輪さまは、悲しみに打ち拉がれた魂が、再び輝くよう導いてくださっているように、私には思えるのです。そのような金輪様の慈悲深き御姿を、私は心を込めて描きたいと思います。

「南無一字金輪仏頂尊」

プロフィール

やまもと むつこ

自然科学を得意分野とするイラストレーター。
元、れいたくキャンパスプラザ（千葉県柏市）趣味の教室講師。

平成十八年より平泉町在住。



平泉町内にある山本さんのアトリエ

金輪さんにお会いして

佐々木 恵 一

この仏様は生きている、すべてわかっているしやる。

旧讃衡蔵で初めてお会いした時のことが昨日のことのように思い出されます。

数年前、新聞記事で知った仏様の御名前は、「一字金輪仏頂尊」。三代秀衡公の念持仏と伝えられ、金輪仏としては数少ない現存する彫像だそうです。その記事の中では、「美しい面差しの前に私は長い間、動くことができなかつた」と、紹介されていました。しかもそれが中尊寺の秘仏だったのには驚きました。私はそれまで、一度も見たことも聞いた記憶もなかつたからです。その記事を読んで興味をわき、いろいろ調べましたが、写真がありません。偶然、図書館で借りた土門拳さん

の写真集で見つけた時には、是非会いたいと思いを募らせていました。

その矢先、花屋を経営している私は、絶対にしではいけないミスを犯してしまいました。誕生日のお花の注文を忘れてしまったのです。しかもそれは、お客様からの電話で発覚しました。慌てて配達はしたのですが、三日も過ぎた誕生日のお花の配達を受け取った方も複雑だったと思います。

その後、注文主のお客様の元へ、お詫びに伺い謝罪しました。昔からのお得意様でしたが、とても怒って許してもらえないだろうと思っていました。しかし、お客様におっしゃっていただいた言葉は、

「配達していただいたのなら、それでいいです。代金は返さなくてけっこうです。」

と、お詫びの気持にと用意していた花束だけお受け取りになり、
「これからも注文しますので、よろしく願います。」

というものでした。それ以上私は何も申し上げられませんでした。自分が逆の立場でしたら、絶対許すことが出来なかつたはず。お客様の言葉が嬉しく、本当にありがたかつたです。私は、涙がずつと止まりませんでした。

しかしこのことがあってから、「自分は花屋失格だ。このまま続けていいのか。」と自問し続けることになりました。毎日、心のモヤモヤを抱えながら仕事をしているうちに、誰かにこの気持ちを打ち明けたい、聞いてもらいたいと思うようになりしました。

その時に頭に浮かんだのがあの時、新聞記事で見た人肌の美しいお顔の仏様でした。その時、私はすでに中尊寺に向ってました。

夕日に染められた月見坂は蟬時雨が競いあっていました。その中を汗をかきながら、旧讃衡蔵まで歩きました。

部屋の中に入ると、金輪様が部屋の中央に御座りになられていました。正面に座り、初めて仏様

と目を合わせた時、その美しいお顔の中に厳しさと優しさを感じました。この仏様は、間違いなく、生きていらつしやる、魂がある。私は自然に手を合わせ、自分の失敗を一心に謝り、「仏様、私はこれからどうしたらいいのか、教えて下さい。」と問いかけました。そうして長い間手を合わせていると、モヤモヤしていたものがすつと消えていき、不思議と、悩んでいた自分の心がおさまってゆくのを感じました。

この仏様のことを知ってから、私の中には一つの疑問がありました。

それは、大日如来が全宇宙の中で最上の仏様と言われているのに、なぜその上に、一字金輪仏頂尊がいるのか。その時、部屋の中に居あわせたお寺の方に思い切つて聞いてみました。

「大日如来がもつと多くの人々を願い、さらに厳しい修行を積んで現れた仏様が金輪様です。」
とてもわかりやすく教えていただきながら、私ははつとしました。私の悩みなどは、取るに足らな

(金剛院 法嗣)

ニガナ (苦菜) キク科

祖父は元々理科の教師をしていたこともあり、生き物、とりわけ植物が大好きだった。私も嫌いでなかったから、よく祖父にくっついて花を見たり、草を手にとったりしていた。幼稚園の頃の一番の友だちを挙げるとしたら、間違いなく「祖父」である。

「おい、ほら、そこに黄色い花があるだろう。茎を折って舐めるととても甘いぞ。」
祖父は春になるといつも、小さな黄色い花を指さしこう言った。
花の名前はニガナ、キク科の多年草で、春になると境内のあちらこちらで可憐な黄色い花を咲かせ。茎を折ってそれを舐めると……実は子供には耐えられないく

らい、渋くて苦い味がするのだ。苦い顔をしている私を見て祖父は「してやったり」とわらっていた。

最初の年こそ祖父の計略にまなまとはまり、文字通り苦汁をなめしたが、二年目以降は、こちらも苦い経験から、そのことを覚えていてなかなかその手には乗らない。しかし、それも善し悪しで、こちらがあまり警戒して茎を舐めないと、祖父が寂しそうな顔をするのを子供ながらにわかっていた。

だから、祖父の顔を伺いながら、何となく舐めたふりをして、いかにも苦くて、そしてだまされたような顔をわざと演出する。すると祖父は満足げに笑みを浮かべ、庭に咲いている他の草花の説明をし

てくれた。

春に境内に咲く黄色い花は多い。マンサク、スイセン、タンポポ、フクジュソウ、どれも甲乙を付けがたい可憐な出で立ちで楽しませてくれる。しかし私にとって「ニガナ」はやはり特別。東北の寒くて長い冬が終わり、春の暖かく甘い香りの空気を吸いながら、その小さな花を見ると、私は祖父と過ごした何年かの春を思い出すのだ。



ニガナ

いこと、まだまだ全然努力が足りない、まだ大したことを何もしていないことを、気付かされました。

私は金輪さんにお会いしてからこれまで、人生においての色々な宿題をいつも出され、それに對する答えを厳しく教えられている気がします。姿は見えなくとも、近くで見守られていて、「間違ったことはしては駄目ですよ、悪いことをした時は素直に謝りなさい。」と、私におっしゃられます。

金輪さんいつもありがとうございます。

人の出会いに御縁というものがありますが、皆様との出会いにもまた御縁があるということを知り、目には見えない大事なものをたくさん頂きました。これからも生きていけば、どこかで必ず私は躓くつまずと思います。その度に金輪さんが良いことも悪いことも学ばせてくれるはずですよ。それを信じ、一日一日、後悔しないように大事にしていこうと思います。

合掌



プロフィール
ささき けいいち
仙台市にて、ハーブと花のお店シヤン・ドウ・フルールを営む。

「へえ。月見坂スタジオ、ですか。可愛い名前ですね」

坂の途中にあるスタジオか。ふむ。煉瓦敷だろうか。渋谷のスペイン坂スタジオが頭に浮かんだ。

毎週木曜午後三時から放送している平泉ひかるFM。現在FM岩手には八つの支局があり、ふるさと元気隊と冠して地域の情報を発信している。二〇一二年四月、平泉町にこの、ふるさと元気隊、平泉支局【月見坂スタジオ】が誕生した。

平泉で仕事をしないかという話をいただいたのは三月下旬のことだった。諸事情があり、当初予定していたスタッフでは開局ができないという。当時、私は福島県内で東日本大震災・福島第一原子力



発電所事故による観光風評被害払拭を目的とした番組を制作していた。あの日、福島県内で被災し放射能と対峙した時の気持ちを糧に無我夢中で仕事をしていたが、契約が三月をもって満了となるといった状況だった。

平泉といえば学生時代の研修旅行で立ち寄った記憶が僅かに残っている。お寺がある町だったはずだ。金色堂に行ったのを覚えている。平成二十三年六月に世界遺産に登録された。地震による被害は少ないらしいが、岩手県沿岸は多大な被害を受けている。

東日本大震災からの復興の一端を担えれば。平泉で仕事をすることを決めたわたしは三月下旬、盛岡市のエフエム岩手本社で【月見坂スタジオ】を耳にしたのだった。

開局式前日の早朝、車に布団と身の回りのものを詰め込んで出発した。住む部屋も決まっていないというあまりにも急な展開に福島の家は本当に家を離れるのか半信半疑だったようだ。平泉町内へ

入ると、コンビニエンスストアの色が違う。建物が低く、空が広い。条例があるのだろう。世界遺産の町へ来たのだと実感した。

月見坂スタジオは「中尊寺の近く」とは聞いていたが、場所がどこかわからない。車を駐車場に止め、辺りをふらふらと彷徨っていると事務所らしき建物が目に入った。若い男の子が一人で作業をしている。これから同じ職場と一緒に働くスタッフだ。聞くと、他のスタッフは月見坂で取材中だという。雑然としたスタジオの様子に本当に三日後に放送できるのか不安になりつつ月見坂に向った。

いざ登ってみると、学生時代の記憶が全くあてにならないことが分かった。こんなに急な坂を登つ

た記憶が無い。こんなに大きな杉の木もあつたのだろうか。一本一本の杉に腕を回したくなった。抱きついて大きさを確認したくなった。木漏れ日が気持ちよく、足が進む。すれ違う人が多くなってくる。景色がどんどん変わってくる。

観光地に来た独特の高揚感と、この町で仕事ができる嬉しさで胸が弾んだ。ふと、目を向けるとのちに一緒に仕事をする仲間が、観光客へインタビューをしていた。軽く挨拶を済ませ、意気揚々と記憶の片隅にある金色堂を目指した。

開局式を終え、迎えた初回放送日。スタジオゲストに菅原正義町長をお招きし、平泉と同時期に世界自然遺産に登録された東京都小笠原村の森下一男町長と繋いだ。



また、月見坂の由来を古都ひらいずみガイドの会、事務局長の関宮治良氏にお話し頂いた。ラジオなので服装は放送に関係ないので、初回ということもあり、スタッフ全員正装だった。とても緊張していた。

月見坂スタジオ開設からもうすぐ一年。また新たな春が巡ってこようとしている。放送回数は四十

本堂の不滅の法灯が、1200年も消えていないと聞いてびっくりしました。金色堂は金だけでなく、貝や象牙などが使われているということをはじめ知りました。

一関市立本寺小学校6年 佐藤 一稀

千手観音様の足の指が一本立っているのは、困っている人のところに行けるようにしているからとわかりました。金字経を間近で見られてよかったです。

一関市立本寺小学校6年 菅原 一樹

不滅の法灯が、町内の方が育てた菜種油で灯っているということを知りました。

一関市立本寺小学校6年 佐藤 大誠

今まで一度も中尊寺に行ったことがなく、初めての見学でしたが、とても楽しかったし、今まで疑問に思っていたことが一つ一つ解けて見学できてよかったですなあと感じました。

一関市立本寺小学校5年 槻山 泉咲

中尊寺のことを詳しく説明してくださいありがとうございます。本寺を築いた人は自在房蓮光ということがわかりました。

一関市立本寺小学校6年 佐藤 凛

金色堂を間近で見るのは初めてでした。すぐくピカピカで感激しました。また見に行きたいです。

奥州市立衣川小学校4年 日高 翔太

私は、初めて金色堂を見て、夜光貝や螺鈿細工にびっくりしました。昔は機械などなくて人の手で作られたこともすごいと思いました。

奥州市立衣川小学校4年 すがわら ゆうか

奥州藤原氏の思いが通じて、これから世界が平和になっていけばいいなと思いました。

奥州市立衣里小学校6年 前川 由

回を超えた。

平泉について知らないことだらけだったわたしが、この一年間多くの平泉の人と関わり、イベントに参加し、お話を聞くことで、少しではあるが知識を身につけることができた。本当に感謝している。

月見坂はスペイン坂のようなリング敷きの坂ではなく、平安時代から続く歴史ある坂だということ。世界遺産は勿論だがそれだけではない。魅力ある祭りやイベントが数多くあり、町民の方々によって伝統が守られ、支えられている。地震についての被害は少ないが二〇〇キロ以上離れたこの町に放射能による風評被害があること。夏は除染のため各学校の校庭が使



えなかったということ。

耳を傾けてくれる「あなた」へ。平泉町の歴史とそこに生活している人々を広く伝え、盛り上げることが東北復興の一助を担うと信じて奔走する日々である。

原爆ドーム合作画



一人の男の子がモグラの絵を描きました。平和ってなあに？

「モグラさんも、安心して顔を出せる世の中。お母さんと中尊寺というお寺に行ったとき和尚さんがそう言っていたの」と男の子。

主唱者 茨城県常総市水海道「語り継ぐ美術館」山崎理恵子

文化財だより

還蔵された金銀字経について

平成二十四年六月に紺紙金銀字

交書一切経のうち、「俱舎論第十

六」一巻が新たに還蔵された。こ

の経の巻頭に、尊者世親造と書か

れているが、部派仏教の設一切有

部派の高僧であつた世親が、弥勒

菩薩の教えを受け、僧の学ぶ法を

説いた経である。

見返絵の中尊は、印相に特徴が

あるが、説法印相の釈迦如来像を

描いたものだと思われる。

これで、中尊寺に還蔵された未

指定の紺紙金銀字交書一切経は十

三巻となる。

經典名 「俱舎論卷第十六」

表紙 「金銀泥宝相華唐草文」

巻頭 「阿毘達磨俱舍論第十六」

尊者世親造

巻末 「設一切有部俱舎論卷第

十六」

題箋 金銀泥複廓

見返絵 樹下説法図

(釈迦・二脇侍菩薩・二

比丘・二供養菩薩・香台・

五宝樹・二飛行楽器・一

輪宝)

入蔵年月 平成二十四年六月

文字色 金銀交書

軸高 二九・四〇cm

軸模様 金銅製魚天子地四弁華文

本紙縦 二六・四〇cm

全長 八〇三・七〇cm

紙数本文 十五

大蔵経No 1558



新刊紹介

(二〇二二年一月〜十二月)

『蝦夷とは誰か』

柳之御所遺跡の調査を担当した著者による蝦夷論

松本建速 同成社 二〇二一年九・九

『北から生まれた中世日本』

東北芸術工科大学東北文化研究センター編

入間田宣夫「安倍・清原・藤原政権の成立を組み直す」

八重樫忠郎「考古学からみた北の中世の黎明」 ほか

高志書院 二〇二二年七・十

『別冊太陽・みちのくの仏像』

平凡社 二〇二二年九

『路上の義経』

篠田正浩 幻戯書房 二〇二三年一

〈学報〉

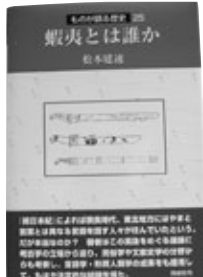
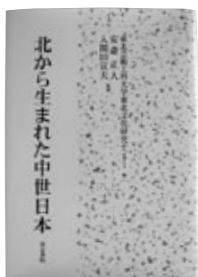
『平泉文化研究年報12号』

岩手県教育委員会 二〇二二年三

『奈良と平泉』——なら学談話会報告——

『奈良女子大学文学部 研究教育年報』第8号 別冊
前川佳代 二〇二一年八・三十一

(奈良女子大学文学部 2011年度)



「積みあげてきたもの」

破石貞子

今年度は一人入会し、会員数は四十名になりました。毎年行われている「中尊寺の法要」での奉詠に加えて、次の行事に参加させていただきました。

●五月八日 東日本大震災一周忌慰霊法要

（於 福島県本宮市 観音寺）

天台座主^{げいか}下がおいでになられての法要でした。私達は、本部講師の先生の句頭に続いているの奉詠でした。

●七月十六日 中尊寺秘仏開眼法要（中尊寺特別収蔵室）

法要に参列の後、一字金輪仏を参拝致しました。

●十月四日 東日本奉詠舞大会

（於 東京・京王プラザホテル）

毛越寺支部と合同で「中尊寺・毛越寺支部」としての参加でした。

詠唱は「山鳥の歌」、詠舞は「地藏菩薩本願詠歌」を

発表しました。「山鳥の歌」は、毎年、御施餓鬼会でお唱えしている曲でもあります。今迄の大会に比べ、練習時間が少なかった不安と、何回も上位入賞をして来たプレッシャーを抱えての舞台でしたが、詠唱の部で優秀賞をいただきました。

長い間積み重ねて来た様々なものが、どんな条件の時でも揺るぎない「底力」になっていたのだと思います。

〈予定〉

●三月二十四日 中尊寺本堂本尊釈迦如来開眼法要

（中尊寺本堂）

法要に参列し奉詠させていただきました予定です。

中尊寺支部の会員は三十代から八十代までと巾広く、知識も話題も豊富で学ぶことが多く、人の輪の大切さを感じます。そして、これからも多くの人の心を癒し、満たしていける活動ができればと思います。

〔関山句囊〕

（平成二十四年六月二十九日 於達谷西光寺）

〈第五十一回 平泉芭蕉祭全国俳句大会より〉

（席題）

大き耳岩と灼けをり磨崖仏 （会長平泉町長賞）

*加藤瑠璃子選 特選 奥州 梅森 サタ

ジュラ紀の色秘めし窟や達谷忌 （毛越寺貫主賞）

特選 平泉 岩淵 洋子

今年竹空の広さをせばめけり （中尊寺貫首賞）

特選 花巻 菅野 トシ

遠雷の楸邨句碑にくぐもれり

秀逸 奥州 岩淵 正力

青田風毘沙門窟におしよせる

秀逸 一関 小野寺 亨

万緑や剥落すすむ磨崖佛

秀逸 一関 小野寺 亨

金堂に木魚いんいん達谷忌

秀逸 一関 稲玉 宇平

青大将お主も世界遺産かよ

秀逸 宮城 鈴木喜久郎

しゃくどりの測りかねたる磨崖仏 （岩手県知事賞）

*佐治英子選 特選 花巻 大平 春子

水音も草刈る音も浄土なる （河北新報社賞）

特選 花巻 関 園子

弁天を守るごとくに暮 （平泉観光協会賞）

特選 平泉 旭 光

藪戸を開けて涼しき仏たち

秀逸 奥州 小野寺昭次

達谷窟のいつの世記す落し文

秀逸 一関 千葉志津子

今年竹空の広さをせばめけり

秀逸 花巻 菅野 トシ

老鷺に耳をあげけし磨崖佛

秀逸 盛岡 鈴木 睦子

鎮もれる毘沙門堂より黒揚羽

秀逸 盛岡 若松美保子

老鷲や耳朶^{じだ}ゆたかなる岩ぼとけ (岩手県議会議長賞)

*小畑柚流選 特選 一関 鈴木きぬ絵

ほととぎす読経洩れくる西光寺 (岩手日報社賞)

特選 花巻 安部 克詠

水音も草刈る音も浄土なる (中尊寺賞)

特選 花巻 関 園子

花あやめ追慕の仏なりしかな

秀逸 一関 千葉 百代

部戸を開けて涼しき仏たち

秀逸 奥州 小野寺昭次

達谷窟のいつの世記す落し文

秀逸 一関 千葉志津子

夏つばめ世界遺産の声発す

秀逸 宮城 砂金 元子

しやくとりの測りかねたる磨崖仏

秀逸 花巻 大平 春子

達谷の草屋に太るかたつむり

(平泉文化会議所理事長賞)

*小菅白藤選 特選 一関 千葉 百代

睡蓮を咲かせ逆さに人歩く (岩手日報社賞)

特選 花巻 菅原砂登子

六月の風化おそれぬ磨崖佛 (岩手日報社賞)

特選 奥州 熊谷 勅子

万緑や剥落すすむ磨崖佛

秀逸 一関 小野寺 亨

伏兵のをるごと戦ぐ夏の草

秀逸 盛岡 草花 一泉

磨崖仏いくたび梅雨をくぐり来し

秀逸 平泉 神野 富江

水音も草刈る音も浄土なる

秀逸 花巻 関 園子

しやくとりの測りかねたる磨崖仏

秀逸 花巻 大平 春子

大き耳岩と灼けをり磨崖仏 (平泉町教育長賞)

*小林輝子選 特選 奥州 梅森 サタ

睡蓮の水に芯ある毘沙門堂 (岩手日日新聞社賞)

特選 奥州 及川 忠子

瑠璃殿に風を運びぬ竹若葉 (毛越寺賞)

特選 北上 伊藤 晴子

老杉の間隔にある青嵐

秀逸 奥州 及川 梅子

楸邨の声をちこちに花木^{はなき}豇豆^{とうけ}

秀逸 奥州 服部 常子

梅雨晴や岩面仏の傷深し

秀逸 奥州 菅原 淑子

黒子^{くろこ}めく女草刈る毛越径

秀逸 金ヶ崎 佐藤 嘉子

べにを濃くさして老いゆく蛇苺

秀逸 花巻 大平 晴子

法灯や毘沙門堂に迷ひ蝦蟇 (平泉観光協会賞)

*照井翠選 特選 宮城 藤野 尚之

西光寺までの青田に吹かれけり (河北新報社賞)

特選 奥州 及川 忠子

^{かび}黴の香の火炎を負へり不動尊 (岩手日日新聞社賞)

特選 奥州 梅森 サタ

眉太き漢の顔や麦の秋

秀逸 一関 菅原 良江

高だかと蝶を呼びたり磨崖佛

秀逸 一関 伊東 静枝

毛越径てのひらほどの青田かな

秀逸 北上 伊藤ふみ子

老鷲や大磨崖佛なみだあと

秀逸 盛岡 木村 耀子

睡蓮の水に芯ある毘沙門堂

秀逸 奥州 及川 忠子

(兼題)

春耕の平野ふたつに割る大河

*加藤瑠璃子選 (天) 一関 桂田 一穂

朴の香や秀衡が領渺渺と

(地) 一関 伊藤けんた浪

雪の影ゆつくり落ちる春障子

(人) 北上 及川由美子

東稲山は目と鼻の先西行忌

秀逸 盛岡 遠藤あきよし

満目の阿豆流為の里田水張る

秀逸 平泉 鈴木 信

ほととぎす天上天下ほしいまま

秀逸 千葉 佐藤茂三郎

みちのくの涯道のあり薄暑光

秀逸 平泉 佐々木邦世

長男の言葉短かし豆の飯

*佐治英子選 (天) 盛岡 清水 芳子

被災地へたんぽぽの絮飛ばしけり

(地) 宮城 鈴木喜久郎

下萌えや礎石の描く大伽藍

(人) 盛岡 芳賀 起夫

山国の雨は大粒穂芽肥ゆ

秀逸 茨城 寂 石

全山の堂塔濡らす花の雨

秀逸 奥州 大石 文雄

摺子木に残るさみどり木の芽和

秀逸 奥州 菅野 好子

阿豆流為の無念の砦きぎす鳴く

秀逸 一関 稲玉 宇平

叩かれて野火の抗ふ古戦場

*小畑柚流選 (天) 奥州 梅森 サタ

花見酒酔へば剣舞素手で舞ふ

(地) 盛岡 浅田 白道

柄杓置く朧月夜の音ひとつ

(人) 花巻 後藤 冴子

永らへて今年も種を浸しけり

秀逸 奥州 青沼 利秋

ものがたり秘むる達谷木下閣

秀逸 奥州 佐々木青矢

義経の駆けたる山河余花の雨

秀逸 宮城 佐藤 みね

筍を担ひで僧の帰りけり

秀逸 一関 小野寺東子

翌檜の一枝はづんで菓立鳥

*小林輝子選 (天) 奥州 服部 常子

南大門礎石の窪みうす水

(地) 平泉 岩渕 洋子

石鯨にはりつく髪や沖縄忌

(人) 宮城 及川 源作

初蕨折れば空気の凹む音

秀逸 一関 伊東 静枝

通り抜けして放心の花見人

秀逸 奥州 菅原 淑子

春の海呼び戻したき命あり

秀逸 平泉 岩渕眞理子

寝釈迦山まぢかに春肥撒く夫婦

秀逸 北上 菊池 郁子

田を植ゑる山下清の絵のやうに

*小菅白藤選 (天) 一関 桂田 一穂

のどけしや物言へる世の楸邨碑

(地) 一関 伊藤けんた浪

万緑やなるほど母は乳二つ

(人) 一関 高橋 悦朗

石仏の見ゆるふるさと種子おろす

秀逸 奥州 小 秋

鐘撞かば吹雪とならむ花万朶

秀逸 一関 森 正江

戦さを生き津波に耐へて桜かな

秀逸 盛岡 馬場 吉彦

楸邨の句碑のまとひし花吹雪

秀逸 平泉 旭 光

ぶらんこに廢校の空揺れ止まず

*照井 翠選 (天) 一関

千葉浅沙男

大津波攫ひ残しの海鞘を嘯む

(地) 一関 小野寺宙外

前奏のなき恋のうたクロッカス

(人) 花巻 大平 春子

大空へ光り返して麦青む

秀逸 奥州 小野寺昭次

文机に古ぶ地球儀霾ぐもり

秀逸 千葉 安彦 四郎

花の魅を椀に散らしぬ啄木忌

秀逸 一関 千葉 百代

竹藪に淡き登月実朝忌

秀逸 平泉 鈴木多佳子

児童生徒

平泉小学校

バトンうけ全力疾走風光る

特選 六年 五十嵐健人

せいくらべひまわり相手にせのびする

特選 六年 三瓶 萌梨

たんぽぽはわた毛になって生きかえる

特選 六年 小野寺香織

長島小学校

ひまわりはみんなをあかるくつらして

特選 五年 佐藤 結衣

わた毛はね白になったらお出かけだ

特選 五年 石川 はな

すいかくい種を吹き出す青い空

特選 六年 岩淵 隆希

平泉中学校

きらきらとテニスコートにひかるあせ

特選 一年 千葉 萌永

蒼い空入道雲も仁王立ち

特選 一年 猪股 観蒼

晴れた空子つばめ達が旅立つ日

特選 一年 安彦 夏希

(平成二十四年二月〜二十五年一月)

復興へ開く秘仏や豊の秋

『二夜庵』俳句 大会賞 桂田 一穂

ひぐらしの火とも水とも平泉

『俳句界』七月号 小菅 白藤

義経堂より双蝶の翔びたてり

『寒雷』八月号 鈴木きぬ絵

金色の雪降りあるか平泉

『草笛』二月号 小菅 白藤

平泉の空を言祝ぐ初鴉

『草笛』四月号 鈴木道紫葉

東稲山を背負ひ春耕始まりぬ

『草笛』六月号 小野寺束子

みちのくに平泉あり春深し

『草笛』六月号 小山 静子

薫風を吹きだしてゐる摩崖仏

『草笛』八月号 鈴木きぬ絵

僧坊の昼を灯して著叢の花

『草笛』八月号 岩淵 洋子

老鷺の声すみわたる中尊寺

『草笛』八月号 福田 利代

黄金の秀衡かい道古代蓮

『草笛』十月号 福島 清

木漏れ日も影も緑や中尊寺

『草笛』十月号 桂田 一穂

僧の足す牡丹供養の一枝かな

『草笛』一月号 小林 輝子

亀鳴くや能「秀衡」を謡ひ継ぐ

一関俳協 三月

小野寺東子

手触れてや楸邨の句碑滴れり

一関俳協平泉吟行

佐々木邦世

あぢきみに袖濡らさるる一首坂

一関俳協平泉吟行

伊藤けんた浪

露帯びて宝篋印塔朽ちしまま

一関句心会・九月

岩淵眞理子

与願の掌露を掬ふや石仏

一関句心会・九月

佐々木邦世

風はらむ寒行僧の大袂

『たばしね』一月号

神野 富江

蜘蛛の囀の孕みて風を往なしけり

『たばしね』五月号

鈴木 信

蕨採りぷつんと命切れし音

『たばしね』五月号

畠山 明子

智拳印結ぶ御仏西日差す

『たばしね』八月号

岩淵眞理子

合掌の指を解きてや百合の花

『たばしね』八月号

鈴木 四郎

奥の院磴百段の蟬時雨

『たばしね』九月号

鈴木多佳子

仏国土濃霧の中に沈みをり

『たばしね』九月号

岩淵眞理子

〔震災後一年〕

遠桜波が形見に置きしもの

〔河北俳壇〕 $\frac{6}{4}$

石巻 三浦ときわ

のこされし人の寒さを思ひゐる

〔河北俳壇〕 $\frac{7}{22}$

山元 綱川 敏子

遠足や地図にあるもの何もなく

〔日経俳壇〕 $\frac{1}{28}$

大船渡 桃心地

みちのくの槌音聞かまほしき春

〔朝日俳壇〕 $\frac{1}{28}$

名古屋 中野ひろみ

一本松の絵入りスタンブ夏見舞

一関俳協 七月

木幡 昌三

鉄路なきホームに佇ちて海霧深し

えづりこ古墳俳句大会

岩淵 洋子

〔関山歌籠〕

(平成二十四年四月二十九日)

〈第三十三回西行祭短歌大会入選歌〉

*小島ゆかり選

春を待ちギラギラ光る鋏の刃にうつるは福島

農氏の顔

青 森 加藤みさを

(中尊寺貫首賞)

闇の中に僧が読む経梵鐘に言問ふ如く声を落

千 葉 大河内卓之

せり

(平泉町長賞)

合掌の指を解きてや百合の花

『たばしね』八月号

鈴木 四郎

奥の院磴百段の蟬時雨

『たばしね』九月号

鈴木多佳子

仏国土濃霧の中に沈みをり

『たばしね』九月号

岩淵眞理子

〔震災後一年〕

遠桜波が形見に置きしもの

〔河北俳壇〕 $\frac{6}{4}$

石巻 三浦ときわ

のこされし人の寒さを思ひゐる

〔河北俳壇〕 $\frac{7}{22}$

山元 綱川 敏子

遠足や地図にあるもの何もなく

〔日経俳壇〕 $\frac{1}{28}$

大船渡 桃心地

みちのくの槌音聞かまほしき春

〔朝日俳壇〕 $\frac{1}{28}$

名古屋 中野ひろみ

一本松の絵入りスタンブ夏見舞

一関俳協 七月

木幡 昌三

ボール蹴り互に掛け声投げ合いて楽しさ無辺
春休みの子ら (平泉観光協会賞)
宮 城 高橋美枝子

耳あてて開栓棒に音を聴く水道水地下を流れ
来たれり (岩手日報社賞)
花 巻 千田 正平

ボックスに被曝線量測られる子は母を見て少
しほほえむ (IBC岩手放送賞)
盛 岡 菊池 陽

乱舞より一瞬の間に列つくり雁は夕焼雲にの
りたり (岩手日日新聞社賞)
一 関 佐々木政子

平成二十三年十月五日～平成二十四年十一月三十日

□ 平成二十三年

十月二十三日 一隅大会 於平川市

講師 藤波洋香 師

「人生いろいろ」

山内より僧侶六名檀徒十名参加



藤波洋香師 一隅大会にて



勝桂子先生による講演 (2月24日)

六月二十五日～二十六日

天台宗保護司会民生児童委員会研修会・総会

於広島市

地藏院 佐々木秀圓出席

九月六日

天台仏教青年連盟全国大会〈陸奥結集〉

十一月六日 午後一時

天台宗一斉托鉢 於中尊寺・毛越寺

山内より五名参加

集まった浄財二〇八、〇一五円は被災寺院へ

十一月十一日～十二日

中央布教研修会 於大正大学

法泉院 三浦章興出席

□ 平成二十四年

二月二十四日

布教師養成所研修会 於中尊寺

講師 行政書士 勝 桂子 先生

「お寺の常識と世間の良識」

山内より二十一名参加

五月十九日

陸奥教区布教師会総会研修会 於中尊寺

講師 日本駆け込み寺代表 玄 秀盛 師

「駆け込み寺から見る現代の世相」

中尊寺より八名参加

於仙台市 中尊寺より五名参加

九月十五日

二部檀信徒会一隅大会 於毛越寺

山内より僧侶二名・檀徒八名参加

十一月十一日

天台宗一斉托鉢 於神宮寺 山内より二名参加

集まった浄財 一一二、〇〇〇円は平川市社会福

祉協議会並び地球救援募金へ

□ 役職任免

(平成二十三年十一月一日)

祖師先徳鑽仰大法会事務局顧問委嘱

中尊寺 山田俊和

(平成二十四年一月二十二日)

一隅を照らす運動顧問委嘱

中尊寺 山田俊和

(同年三月十日)

祖師先徳鑽仰大法会教区事務所所員委嘱

観音院 清水広元

円教院 千葉快俊
 瑠璃光院 菅野康純
 葉樹王院 北嶺澄照
 大徳院 菅原光聰

(同年四月一日)

天台宗総合研究センター研究員委嘱

真珠院副住職 菅野澄円

(同年五月七日)

機構検討委員会委員長任命

中尊寺 山田俊和

□ 褒賞 (平成二十四年十月二十九日)

布教功勞表彰 瑠璃光院 菅野康純

□ 教師補任

(平成二十三年四月二十一日)

中律師 地藏院法嗣 佐々木秀史

(平成二十四年四月二十一日)

大僧都 観音院 清水広元

大僧都 葉樹王院 北嶺澄照

大僧都 常住院法嗣 佐々木長生
 大僧都 真珠院副住 菅野澄円
 権大僧都 円教院 千葉快俊
 少僧都 円乘院法嗣 佐々木五大
 律師 金剛院法嗣 破石晋照

□ 経歴行階履修

廣学豎義履修 (平成二十三年十月五日)

常住院法嗣 佐々木亮王

観音院法嗣 清水秀法

御神事能番組

平成二十四年五月四日

古式式三番

開口 三浦 章興 大鼓 佐々木五大
 祝詞 千葉 快俊 小鼓 破石 晋照
 若女 菅野 澄円 笛 清水 秀法
 老女 菅原 光聰 後見 佐々木秀厚

狂言

佐渡狐

奏者 菅野 澄円
 佐渡の百姓 破石
 越後の百姓 破石 晋照

能

竹生島

ツレ・天女 佐々木五大
 シテ 北嶺 澄照 太鼓 菅野 宏紹
 ワキ 菅野 成寛 大鼓 佐々木 長生
 ツレ 佐々木秀厚 小鼓 菅原 光聰
 間 破石 晋照 笛 清水 広元

五月五日

古式式三番

狂言 仏師

田舎者 破石 晋照
 すっぱ 後見 佐々木五大
 清水 秀法

能

秀衡

ツレ 佐々木五大
 シテ 佐々木邦世 太鼓 三浦 章興
 ワキ 佐々木秀厚 大鼓 千葉 快俊
 ツレ 菅野 成寛 小鼓 佐々木 仁秀
 佐々木亮王 菅野 澄円
 間 破石 晋照 笛 菅野 澄円

秋の藤原まつり中尊寺能

十一月三日

能

秀衡

ツレ 佐々木五大
 後シテ 佐々木邦世 太鼓 三浦 章興
 前シテ 北嶺 澄照 大鼓 千葉 快俊
 ワキ 佐々木秀厚 小鼓 菅原 光聰
 ツレ 菅野 成寛 笛 清水 広元
 佐々木亮王 破石 晋照

本尊造立結縁浄財寄進 御芳名

一般

神奈川県	大槻幸子様	百十万円	仙台市	(株)橋本店様	十万円
花巻市	金濱準治・千恵様	百万円	遠野市	千葉教子様	十万円
群馬県	常住寺様	五十万円	八幡平市	畠山トミ子様	十万円
東京都	正法院様	五十万円	青森県	鈴木 明・朝子様	十万円
一関市	(株)松栄堂様	五十万円	東京都	佐々木多門様	十万円
盛岡市	鈴木紀子様	二十三万円	東京都	野村万作様	十万円
一関市	(有)セロン岩手様	二十万円	神奈川県	佐藤芙蓉様	十万円
平泉町	駅前芭蕉館様	二十万円	神奈川県	安田悦郎様	十万円
平泉町	(有)芭蕉館様	二十万円	長野県	戸津圭之介様	十万円
平泉町	平泉町観光ガイド事務所様	二十万円	奥州市	(株)えさしわいわいネット様	八万円
仙台市	光圓寺様	十万円	盛岡市	(株)三衡設計舎様	七万円
福井県	西光寺様	十万円	滋賀県	金田 敦様	六万円
神奈川県	大聖院様	十万円	一関市	永泉寺様	五万円
宮城県	大聖寺様	十万円	山形県	性相院様	五万円
八幡平市	(有)西根舗装建設様	十万円	平泉町	丸山芳広土地家屋調査士事務所様	五万円
平泉町	男山酒店様	十万円	平泉町	食事処 むつみ様	五万円
			平泉町	やお清様	五万円
			盛岡市	高橋千賀子様	五万円
			奥州市	海鋒 守様	五万円

紫波町	藤原恒久様	五万円	静岡県	間渕うめ子様	二万円
京都府	森 忠兵衛様	五万円	大阪府	黒川義則・節子様	二万円
一関市	(有)古川ポンプ製作所一関支店様	四万円	山形県	海老名京子様	二万円
埼玉県	吉祥寺様	三万円	兵庫県	蓮華寺様	一万円
平泉町	自性院様	三万円	盛岡市	(社)岩手県文化財愛護協会様	一万円
平泉町	翁知屋様	三万円	一関市	(有)華匠苑様	一万円
平泉町	こがねや菓子店様	三万円	一関市	(有)木村塗装様	一万円
平泉町	千葉正彦様	三万円	盛岡市	及川和哉様	一万円
秋田県	赤川優良様	三万円	盛岡市	佐藤明子様	一万円
奥州市	佐藤善行様	三万円	一関市	佐藤冬扇様	一万円
埼玉県	山口鉄也様	三万円	奥州市	佐々木道雄様	一万円
愛知県	荒川道雄様	三万円	奥州市	鈴木千賀子様	一万円
大分県	兔洞義孝様	三万円	北上市	田村朋子様	一万円
栃木県	寶蓮寺様	二万円	紫波町	簗福サキ子様	一万円
奥州市	千田二男様	二万円	二戸市	赤穂みつ様	一万円
奥州市	服部完郎様	二万円	東京都	池澤卓治様	一万円
東京都	郭 怡梅様	二万円	東京都	石野 讓様	一万円
茨城県	吉川 弘様	二万円	東京都	岩切和子様	一万円
埼玉県	佐藤重光様	二万円	東京都	佐藤静子様	一万円

東京都	鈴木規夫様	一万円	仙台市	東志富美様	一万円
東京都	長谷川雪子様	一万円	山形県	丹野将雄様	一万円
東京都	萬 俊麟様	一万円	盛岡市	谷藤泰司様	五千円
神奈川県	中澤克之様	一万円	一関市	岩渕浩子様	五千円
千葉県	大関義明様	一万円	一関市	高橋 健様	五千円
千葉県	西澤 宏・良江・知紗様	一万円	一関市	畠山喜一様	五千円
埼玉県	宮崎恵子様	一万円	大船渡市	千葉正幸様	五千円
群馬県	永井光八様	一万円	奥州市	阿部和夫様	五千円
長野県	田中悠樹様	一万円	釜石市	岩切 潤様	五千円
静岡県	豊田日穂様	一万円	釜石市	菊地公明様	五千円
岐阜県	高安勝久様	一万円	東京都	宮坂健介様	五千円
兵庫県	稲森善彦様	一万円	神奈川県	小林由枝様	五千円
兵庫県	神行武彦様	一万円	兵庫県	早瀬眞理子様	五千円
兵庫県	下村法寛様	一万円	新潟県	吉岡聖女様	五千円
香川県	三谷朋幹様	一万円	仙台市	加藤てる美様	五千円
福島県	若月常男様	一万円	盛岡市	中村紀顕様	三千円
仙台市	小野 明・亮子様	一万円	神奈川県	岸 毅様	三千円
仙台市	小井川百合子様	一万円	千葉県	鈴木猛雄様	三千円
仙台市	椿田貴美代様	一万円	千葉県	吉岡成哲様	三千円

群馬県	有賀 明様	三千円	平泉町	吉田悦雄様	一千円
大阪府	小柳富美夫様	三千円			
盛岡市	青柳充子様	二千円			
北海道	村上 叶様	一千円	奥州市	熊谷典子様	一万円
北海道	鳥潟あやめ様	五百円	一関市	佐々木美佳様	一万円

職員

一関市	佐藤太郎様	十万円	一関市	阿部真紀様	一万円
神奈川県	遠藤東子様	四万円	一関市	千葉志津枝様	一万円
千葉県	藤井純子様	五万円	平泉町	森 晶子様	一万円
奥州市	菅原みき子様	三万円		千葉武義様	一万円
奥州市	菅原睦子様	三万円			
奥州市	千葉昌平様	三万円			
平泉町	菅野家(永根)様	三万円			

平成二十四年十一月末日現在

花巻市	菅原賢和様	三万円			
東京都	林 昌宏様	三万円			
奥州市	菅原義光様	一万円			
東京都	初貝阜子様	一万円			
愛知県	中川勝市様	一万円			

御奉納者 御芳名

一 西陣美術織軸「金色堂中央壇上諸仏 三軀」

盛岡市 榑川徳様

京都市 西陣美術織工房様

一 紙胎漆塗彩色華籠

横須賀市 藤井郁江様

一 沈香木

川崎市 伊藤豊吉様



一 日本画「金色堂散華心象図」

鎌倉市 村田林蔵様

一 日本画「黎明金色堂」

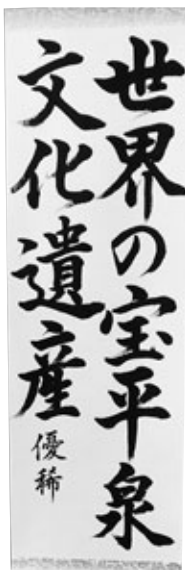
埼玉県 浅野信康様

一 紫薫枕

八幡平市 岩手県立平館高等学校様

一 書

一 関市 千葉未紗稀・優稀様



浄財御奉納者 御芳名

平成二十四年四月〜平成二十四年十一月

復興の花中尊寺ハスを広める会様

三万円

群馬県 永寿寺様

五万円

群馬県 恩行寺様

五万円

群馬県 禅養寺様

四万四千元

慈眼院 遠田弘賢様

十万円

願行寺 羽田浩修様

十万円

西岸寺 井上邦昭様

十万円

五明和子様

百万円

満願寺様

五万円

東京都 孝養寺様

三万円

東京都 傳通院様

三万円

東京小石川ロータリークラブ様

三万円

無相教会 奉詠巡拝団様

三十万円

群馬教区天王院寺社参拝団様

五万円

天台宗教誨師会様

三万円

神奈川県 天王院様

十万円

みちのくコカ・コーラボトリング(株)様

三万円

あうんの会様

五万円

佐藤芙蓉様

十万円

一関信用金庫様

十万円

青森県 明光寺様

三万円

栃木県 壬生寺様

三万円

埼玉県 倉常寺様

三万円

浄土寺 長内悦道様

三万円

ウエーサカ仏教会様

十万円

金田 敦様

三万円

常住寺 蘭 実丞様

二十万円

天台宗栃木教区寺庭婦人会様

三万円

ウエーサカ仏教会様

二十五万円

群馬県仏教連合会様

五万円

天台宗九州東教区様

三万円

岩手県退職女性校長会様

四万円

蜂谷克己様

十万円

荒川道雄様

三万円

青森県 神宮寺様

五万円

木村智広様 三万円
 御園康仁様 三万円
 (株)オフィスGOTO様 十万円
 栃木教区 池田宗讓様 三万円
 東京都 西光寺様 十万円
 京戸富栄様 三万円
 公益財団法人 イオン環境財団様 五万円
 西村専次様 五万円
 天台宗東京教区第一部 白業会様 五万円
 東京都 圓通寺様 十万円
 成就寺 板倉慈愼様 三万円
 群馬教区西前橋部檀信徒会伝道師会様 三万円
 東芝電材マーケティング(株)様 三万円
 臨濟宗妙心寺派兵庫教区様 三万円
 小友成人教室様 四万円
 東芝ライテック(株)様 三万円
 三略会様 六万円
 盛岡・花巻商工会議所女性会様 五万円
 愛知県 龍泉寺様 三万円

滋賀県 南山坊様 五万円
 (有)桜井様 五万円
 瀬見温泉旅館組合様 三万円
 東京都 西光寺様 三万円
 日立オムロンターミナルソリューションズ(株)様 五万円
 北山西部町内会会長 四竜亮真様 三万円
 東京都 圓通寺様 十万円
 奥州くりはら義経会様 五万円
 茨城県 月山寺様 十万円
 岩槻仏教会様 三万円
 埼玉県 慈恩寺様 三万円
 茨城県 養福寺様 三万円
 一八会様 三万円
 東京都墨田区保護司会様 五万円
 輪島市経済振興協議会様 三万円
 神社本庁 清和会様 六万円
 真言宗豊山派仏教婦人会様 十万円
 真言宗豊山派園勝院様 十万円
 北群馬郡檀信徒会様 六万円

千葉県 東榮寺様 八万円
 神奈川県 大聖院様 十万円
 福島県 浄光院様 五万円
 善光寺信徒会様 五万円
 東京都 最勝寺様 十万円
 裏千家様 五万円
 福島県 阿弥陀寺様 三万円
 三世会様 三万円
 天台宗埼玉教区第四部檀信徒総代会様 五万円
 青蓮寺 鶴岡信良様 三万円
 川崎映像様 五万円
 東京都 長寿院様 三万円
 八重樫宗貞様 五万円
 (株)鶴屋百貨店様 五十万円
 一関信用金庫平泉支店様 三万円

(順不同)

不動尊篤信御奉納者 御芳名

平成二十三年九月一日〜平成二十四年十月三十日

富良野市 南 和夫様 三万五千元
 小樽市 村口初男様 季毎御供物
 富良野市 野村 隆様 季毎御供物
 青森県 南部町 工藤一男様 季毎御供物
 弘前市 笹 隆治・哲子様 季毎御供物
 平川市 小笠原喜世様 二十三万九千四百円
 平泉町 千葉製材所 千葉芳美様 三万円
 宮古市 槻川原光昌様 三万円
 盛岡市 中村京子様 三万円
 一関市 沼倉研一様 三万円
 盛岡市 野口芳子様 三万円
 一関市 橋本晋栄様 三万円
 花巻市 伊藤敏博様 三万円
 盛岡市 (株)光羽建設 伊藤光明様 三万円
 平泉町 一関信用金庫平泉支店様 七万円
 川嶋印刷(株)様 十万円
 一関市 (株)東北鉄興社様 三万円

一関市 (有)豊隆軌道様 七万五千元
山平様 三万円
一八 渋谷正幸様 三万円
(株)精茶百年本舗様 三万円
及川元一様 三万円
二戸市 米沢 励様 季每御供物
奥州市 佐々木 久様 三万円
米朝会 岩淵和子様 七万二千元
小野寺宮雄様 三万円
一関市 小野寺宮雄様 三万円
富谷町 富谷町 小山利男様 三万円
栗原市 (有)金成工務店様 三万円
仙台市 舘澤 等様 三万円
渡辺琢也様 三万円
宮城県 日本生命仙台支部長会様 五万円
南三陸町 山口 昇様 三万円
秋田市 木村英夫様 七万二千元
横手市 赤川健次様 五万円
赤川優良様 三万五千元
大仙市 (有)ベル美容室 高橋紀美世様 季每御供物

大館市 加賀谷正子様 季每御供物
山形市 菅原好美様 五万五千元
宇都宮市 阿満文字様 三万円
つくば市 石井佳央里様 三万円
水戸市 藤枝恵枝子様 季每御供物
新潟市 松原晴樹様 季每御供物
銚子市 (株)イクオリティ 石毛裕之様 三万円
東京都 中村武司様 十万五千元
(有)シー・エヌエス様 三万五千元
前田 理様 三万円
藤沢市 矢鋪雅子様 三万円
彦根市 金田 敦様 三万円
和泉市 辻林正博様 八万円
東大阪市 青木良子様 五万円

東日本大震災御支援者 御芳名

兵庫県 蓮華寺様 十万円
千葉県 蜂谷克己様 三万円
大阪府 念法眞教 総本山 金剛寺様 十万円
千葉県 御園康仁様 三万円
栃木県 天台宗栃木教区寺庭婦人会様 三万四千元
青森市 青森ねぶた制作者第五代名人位様 三万円
千葉作龍 三万円
岐阜県 長滝白山神社 宮司 若宮多門様 三万円
兵庫県 (株)アマミ建築工業様 十万円
山形県 山澤美千子様 百万円

11月28日

義援金募金箱に寄せられた浄財七三七、四六三円を
野田村に送金

11月28日

義援金募金箱に寄せられた浄財七三七、四六三円を
久慈市に送金

11月29日

義援金募金箱に寄せられた浄財七三七、四六二円を
洋野町に送金

12月16日

米・寝具・書籍を東松島萬寶院の被災者支援活動に
寄託

12月22日

義援金募金箱に寄せられた浄財九七四、一三七円を
南三陸町災害対策本部に送金

東日本大震災支援活動報告

(平成23年11月～平成25年3月)

11月19日

陸前高田市高田高校にベンチ十五台寄贈

平成24年1月1日

さんさんの会を通して年末年始のおせち料理・保存食
を支援

1月26日

義援金募金箱に寄せられた浄財七八三、六四二円を
女川町災害対策本部に送金

1月26日

「いわて美しき陸中海岸写真集」製作に協賛

2月8日

さんさんの会を通し大船渡地区住宅被災者の方々に
コタツ・コタツ布団六十組を支援

2月27日

義援金募金箱に寄せられた浄財一、〇五七、九四二
円を石巻市災害対策本部に送金

3月4日～11日

不動堂にて震災復興祈願護摩二十一カ座を奉修

3月11日

本堂にて震災物故者一周忌慰霊法要を執行

3月11日

震災物故者の一周忌回向を陸前高田市内にて執行

3月13日

義援金募金箱に寄せられた浄財七二九、一五八円を

東松島市災害対策本部に送金（内二二、二九三円は不

動堂復興祈願護摩浄財）

4月5日

義援金募金箱に寄せられた浄財八六五、一七七円を
松島町災害対策本部に送金

4月16日

義援金募金箱に寄せられた浄財八六五、五七四円を
塩竈市に送金

5月9日

義援金募金箱に寄せられた浄財八七六、六七九円を
多賀城市災害対策本部に送金

5月9日

義援金募金箱に寄せられた浄財八七六、六七八円を

七ヶ浜町に送金

5月31日

義援金募金箱に寄せられた浄財一、〇四五、六七七
円を仙台市災害対策本部に送金

5月31日

義援金募金箱に寄せられた浄財一、〇四五、六七七

円を名取市災害対策本部に送金

6月27日

義援金募金箱に寄せられた浄財九三七、六九二円を

岩沼市災害対策本部に送金

6月27日

義援金募金箱に寄せられた浄財九三七、六九二円を

亘理町災害対策本部に送金

7月30日

義援金募金箱に寄せられた浄財一、〇五五、三六七
円を山元町災害対策本部に送金

7月30日

義援金募金箱に寄せられた浄財一、〇五五、三六八
円を新地町災害対策本部に送金

8月22日

義援金募金箱に寄せられた浄財九八一、五五七円を
南相馬市災害対策本部に送金

8月22日

義援金募金箱に寄せられた浄財九八一、五五八円を
相馬市災害対策本部に送金

9月2日～10月28日（日曜毎）

三陸地域の郷土芸能保存会の方々を招き境内で奉演

9月4日～11日

不動堂にて震災復興祈願護摩供二十一カ座を奉修

9月7日

義援金募金箱に寄せられた浄財八六八、〇四五円を

9月7日

義援金募金箱に寄せられた浄財八六八、〇四五円を
双葉町災害対策本部に送金

9月18日

義援金募金箱に寄せられた浄財八〇〇、九〇四円を
大熊町災害対策本部に送金

10月11日

義援金募金箱に寄せられた浄財八八九、四二三円を
富岡町災害対策本部に送金

10月11日

義援金募金箱に寄せられた浄財八八九、四二三円を
楢葉町に送金

11月1日

義援金募金箱に寄せられた浄財八一七、二二九円を
いわき市災害対策本部に送金

11月1日

義援金募金箱に寄せられた浄財八一七、二二九円を
広野町に送金

12月10日

義援金募金箱に寄せられた浄財七〇〇、〇〇〇円を
飯館村に送金

12月10日

義援金募金箱に寄せられた浄財七〇〇、〇〇〇円を
川内村に送金

12月10日

義援金募金箱に寄せられた浄財七〇〇、〇〇〇円を
葛尾村に送金

平成25年3月4日～11日

不動堂にて震災復興祈願護摩二十一カ座を奉修

3月11日

本堂にて震災物故者三回忌慰霊法要を執行

3月11日

秘佛御開帳拝観料の一部五、〇〇〇、〇〇〇円を陸
前高田市小中学校復興基金に寄付

3月18日

秘佛御開帳拝観料の一部五、〇〇〇、〇〇〇円を私
大ネット36「南三陸研修センターボランティア活動・
建設支援募金」に寄付

今後も支援活動を継続して参ります。

〈中尊寺総務部〉

執務日誌抄

平成二十三年九月一日～

二十四年十一月三十日

平成二十三年

◇九月

一日 月次大般若(本堂)

瀬見亀割観音祭礼(快俊出向)
大船渡鎮魂・復興祭法灯分
灯式(本堂)

二日 復興祈願護摩(十一日、貫首・
一山僧侶 不動堂)

三日 泰衡公御月忌(金曼供 本堂)

智山派宗務総長様ほか四名
来山(参与邦世案内)

四日 平泉総社神輿渡御

六日 高崎仏教会様十名団参(参与

邦世挨拶)

八日 立正佼成会女性会長会様六
名来山(総務案内)

十日 平泉世界遺産登録記念『国宝の
仏像・掛軸展』開会式(執事長
於盛岡川徳)

十一日 五郎沼葉師神社例大祭及び
東日本大震災復興祈願祭
(参与秀圓・章興 於紫波町)

向月命日法要(本堂)
ドナルド・キーン氏講演会
(「我が思い」を語る 本堂)

十五日 日蓮宗江戸川仏教会様来山
十六日 ウェーサカ仏教会臨時総会
(法務康純 於一関)

十七日 白符忌(本堂)
藤原経清公命日祭(参与光中
於奥州市江刺区)

十八日 吉野金峯山寺管領五条〇〇師
来山

小島直文様一行十三名長唄

奉納(本堂)

十九日 赤堂稲荷例祭(護摩供)
駐日ドイツ大使フォルカー・
シュタンツェル氏来山(貫首
案内)

平泉観光協会理事会(執事長
於観光協会)

二十二日 藤井郁江氏来山(貫首 応接)
二十三日 秋彼岸会法要(本堂)
お経を読む会(法泉院)

二十四日 平泉復興祭開会式(執事長 於
観自在王院跡)

二十八日 亀井忠雄先生奉演(本堂)
三十日 第十九回平泉町社会福祉大
会(快俊 於平泉文化遺産C)

◇十月

一日 月次大般若(本堂)

三陸郷土芸能奉演(宮古市 津
軽石さんさ踊り)

二日 慈眼会(本堂)

三陸郷土芸能奉演(大船渡市
赤沢鑑剣舞)

- 四日 延暦寺法華大会広学豎義(執事長 登敷)
- 五日 貫首 講話(岩手県安全運転管理者選任事業所様 於盛岡)
- 八日 貫首 法話(西桜印刷社員旅行様 かんざん亭)
- 九日 三陸郷土芸能奉演(宮古市小沢鹿子踊り)
- 十日 三陸郷土芸能奉演(大船渡市川原鉦剣舞)
- 十一日 東日本大震災物故者追善回向月命日法要(本堂)
- 十二日 文部科学大臣中川正春氏ほか十名来山(貫首案内)
- 十四日 貫首 法話(東大学士会様十六名 かんざん亭)
- 十六日 三陸郷土芸能奉演(大船渡市門中組虎舞)
- お経を読む会(大徳院)
- 十八日 曹洞宗福聚院観音講一行団参(参与光中案内)
- 下仁田常住寺様二十一名団参

- 十九日 岩手県調停協会長様来山(貫首 応接)
- 二十日 小笠原村長森下一男氏来山(貫首・執事長 応接)
- 二十一日 村田林蔵絵画展観覧(貫首・澄照 於盛岡川徳)
- 二十三日 三陸郷土芸能奉演(大槌町城山虎舞)
- 二十五日 東京西光寺福聚教会様二十七日名団参(宏紹案内)
- 貫首 講話(隅滋賀大会 於米原市)
- 郡山市仏教会様三十八名団参(五大案内)
- 二十七日 真言宗豊山派徳昌寺様三十三名団参(宏紹案内)
- 二十八日 秀衡公御月忌(金曼供 本堂)御開帳記者会見(旧讃衡蔵特別収蔵室)
- 二十九日 三陸郷土芸能奉演(陸前高田市槻沢鉦剣舞)
- 三十日 三陸郷土芸能奉演(釜石市吉

- 里吉里鹿踊り)
- ◇十一月
- 一日 秋の藤原まつり開幕
藤原四代公追善法要
稚児行列
郷土芸能奉演(江刺 行山流角懸麗羅/胆沢 朴ノ木沢念仏剣舞)
平泉駅リニユーアルオーブ
ン記念式典(執事長 於平泉駅前広場)
- 二日 菊供養会(本堂)
お経を読む会(貫首)
- 三日 郷土芸能奉演(関 市野々神楽中尊寺能「経政」、狂言「附子」、謡・仕舞(二関・平泉喜桜会奉納 能舞台)
- 郷土芸能奉演(衣川 川西念佛劍舞/胆沢 行山流都鳥麗羅/平泉 達谷窟毘沙門神楽)
- 岩手日報文化賞・体育賞贈呈式(執事長 於盛岡ランドH)
- 五日 三陸郷土芸能奉演(宮古市 田
- ◇十二月
- 一日 月次大般若(本堂)
- 二日 境内一斉清掃
- 三日 平泉発「デジタルサイネー」ジトラリアル」開始セレモニー(総務 於役場)
- 駐日各国大使十カ国二十名来山(執事長)
- 五日 平泉町交通安全運動推進町民大会(管財 於役場)
- 平泉観光協合理事会(執事長)
- 六日 貫首 講話(宗教新聞社様 於市ヶ谷)
- 七日 薬師会(讃衡蔵)
- 讚衡蔵委員会
- 十日 曹洞宗総持寺副監院石田征史師他八名来山(執事長)
- 前平泉町消防団長岩淵照美氏

- 瑞宝双光章叙勲祝賀会(澄元 於平泉レスト)
- 十一日 東日本大震災物故者追善回向月命日法要(本堂)
- 「北上川文化フォーラム」(貫首 於ペリーノH一関)
- 十二日 一関警察官友の会主催駐在所夫人感謝状贈呈式(総務広元 於ペリーノH一関)
- 外務省課長補佐貝塚寛子氏・事務官宇津山祥子氏他四名来山(執事長挨拶)
- 十四日 弥陀会(本堂)
- 十五日 天台宗北総教区宗務所長様他十六名団参(貫首)
- 中尊寺節分講中総会
- 十六日 熊本鶴屋百貨店社長様来山(貫首・執事長・管財)
- 十七日 白山会(本堂)
- 十八日 骨寺村荘園米奉納
- お経を読む会(真珠ノ澄円)
- 十九日 陸前高田・大船渡慰霊行脚

- (澄円)
 - 二十日 曹洞宗総持寺様団参
 - 二十一日 平泉観光推進実行委員会(総務)
 - 二十四日 本尊造立委員会
 - 文殊会(経蔵)
 - 二十八日 恒例御供餅つき
 - 三十一日 午後三時 一山総礼
- 平成二十四年**
- ◇一月
- 一日 ○時 新年祈禱護摩供修行
 - 七時 東山町(若水送り)着
 - 九時半 正月祈禱護摩(本堂)
 - 十時半 総礼
 - 修正会 釈迦供(本堂)
 - 堂籠り(〓五日 結果、開山堂)
 - 二日 九時半 正月祈禱護摩(本堂)
 - 修正会 業師供(業業師・讚衡蔵)
 - 十四時 謡初め(広間)
 - 三日 九時半 正月祈禱護摩(本堂)

- 修正会 山王供(山王堂)
- 十二時 二元三会 慈恵供(本堂)
- 四日 修正会 業師供(瓊璃光院業師堂)
- 五日 修正会 文殊供(経蔵)
- 大般若会(利生院弁天堂)
- 六日 修正会 釈迦供・月山供(釈迦堂)
- 七日 修正会 白山十一面供(本堂)
- 大般若会(本堂)
- 修正会 弥陀供(金色堂)
- 八日 修正会 業師供(讚衡蔵)
- 一字金輪仏・千手観音法楽
- 修正会結願
- 十三時半 恒例「金盃抜き」
- 十一日 東日本大震災物故者追善回向月命日法要(本堂)
- 十二日 立正佼成会花巻教会様来山(貫首 応援)
- 十四日 慈覚会(御影供 本堂)
- お経を読む会(貫首)
- 十八日 貫首 講話(御全日本仏教婦人連盟様 於谷中・天王寺)
- 二十日 貫首 講話(金ヶ崎町商工会様

- 於みどりの郷)
 - 二十七日 立正佼成会次代会会長庭野光祥氏来山(参与邦世挨拶)
 - 二十八日 文化庁長官近藤誠一氏特別講演(総務広元 於平泉文化遺産C)
 - 二十九日 文化財防火訓練
 - 高橋國紀氏旭日双光章受章を祝う会(総務広元 於武蔵坊)
 - 三十日 念法真教務総長桶屋良祐師来山(執事長 応援)
 - 三十一日 臨濟宗妙心寺様来山
- ◇二月
- 一日 月次大般若(本堂)
 - 三日 恒例大節分会(関取高見盛招く。歳男歳女七十名、町内園児)
 - 五日 妙林寺様十五名団参(管財澄元案内)
 - 八日 盛岡市長谷藤裕明氏来山(執事長 応援)
 - 十一日 東日本大震災物故者追善回向月命日法要(本堂)
 - 十二日 高橋一男氏旭日双光章受章

- を祝う会(総務広元 於武蔵坊)
 - 十三日 文部科学副大臣森ゆうこ氏来山(執事長案内)
 - 世界遺産認定証授与式(執事長 於平泉文化遺産C)
 - 世界遺産条約採択四十周年記念開幕式典(執事長 於ペリーノホテル一関)
 - ユネスコ事務局長イリーナ・ポコバ氏来山(執事長案内)
 - 世界遺産関係者
 - 涅槃会御逮夜(本堂)
 - 涅槃会(本堂)
 - お経を読む会(円教院)
 - 二十日 平泉町世界遺産推進基金運営委員会(執事長 於平泉文化遺産C)
 - 二十四日 平泉町世界遺産地域協議会(執事長 於平泉町保健C)
- ◇三月
- 一日 月次大般若(本堂)
 - 二日 文化観光振興基金運営委員

- 会 執事長 於役場)
- 貫首 講話(東日本手外科研究会様 於盛岡)
- 四日 須藤治義氏「卓越技能章」受章祝賀会(康純 於武蔵坊)
- 五日 復興祈願護摩供(〓十一日、貫首・山僧侶 不動堂)
- 六日 貫首 講話(東北ホテル協会様 於ペリーノH)
- 七日 駐日フランス共和国大使クリスチャン・マセ御夫妻、駐日ポーランド大使ヤドヴィガ・ロドヴィイツチ・マリア・チェホフスカ御夫妻来山(貫首・執事長)
- 八日 岡山教区仏教青年会様来山
- 九日 駐日ポーランド大使ヤドヴィガ・ロドヴィイツチ・マリア・チェホフスカ氏来山(貫首・執事長)
- 十一日 東日本大震災物故者追善回向月命日法要(本堂)

- 十二日 天台真盛宗西教寺様三十五名
団参
- 十九日 基衡公御月忌(胎曼供 本堂)
お経を読む会(金剛ノ晋照)
(社)平泉観光協理理事会(執事長
於観光協会)
- 二十日 春期一山会議(広間)
春彼岸会法要(法華三昧 本堂)
総代・世話人会総会(執事長・
法務他 於武蔵坊)
- 二十三日 源義経公東下り行列保存会
総会(総務澄円 於滝沢魚店)
- 二十四日 開山会(護摩供 開山堂)
エジプト外務大臣ムハンマド・
カメル・アムル氏来山(執
事長案内)
- 二十六日 平泉町観光審議会(執事長
於役場)
- 二十七日 平泉町社会福祉協議会理事
会(総務広元 於町福祉活動C)

◇四月

- 一日 月次大般若(本堂)

- 二日 讚衡藏企画展「経絵の世界」
(五月二十日)
- 二日 群馬教区沼田部伝道師会・檀
信徒会様団参
- 三日 エフエム岩手ふるさと元氣
隊平泉支局開設式(執事長
於平泉レスト)
- 五日 復興の花「中尊寺ハス」株分
け式(貫首 於一ノ倉邸庭園内)
- 八日 仏生会(本堂)
- 八日 お経を読む会(円乗ノ五六)
- 九日 村田林蔵氏、絵画奉納(貫首・
総務 本堂)
- 十日 外務省地球規模総括課外務事務官
斎藤健氏来山
- 十一日 東日本大震災物故者追善回
向月命日法要(本堂)
- 十三日 平泉観光推進実行委員会総
会(執事長 於役場)
- 十三日 群馬教区永寿寺様四十三名
団参(参与光中挨拶)
- 平泉町世界遺産推進協議会

- 十四日 役員会 執事長 於平泉文化遺産C
貫首 講演(ミュージカル「アテ
ルイ」オープニング記念講演会 於
たざわこ芸術村わらび劇場)
- 十五日 天台宗陸奥教区寺院婦人会
総会(総務 於泉橋庵)
- 十五日 ポーランド大統領夫人アンナ・コ
モロフスカ氏来山(貫首案内)
- 十六日 四寺廻廊総会(執事長他 於電
通東日本仙台支社)
- 十七日 貫首 講話(岩手県自動車販売
店協会様 於Hメトロポリタン盛
岡NW)
- 十八日 菊まつり協賛会総会(大広間)
- 十九日 平泉世界遺産推進協議会総
会(執事長 於役場)
- 二十一日 ミヤンマー連邦共和国仏教会会長
ウ・クマラビワンタ師来山
(貫首挨拶)
- 二十二日 恒例花まつり子供大会
神作光一先生句碑除幕式
(参与光中・法務宏紹 於西行の森)



- 二十五日 桜友会清掃奉仕(於北坂)
- 二十八日 ルーブル美術館館長来山
(秀厚 於芭蕉館)
- 二十九日 西行法師追善法要(本堂)
第三十三回西行祭短歌大会(講
師小島ゆかり氏「歌と出会う」)

◇五月

- 一日 春の藤原まつり開幕
藤原四代公追善法要
稚児行列
- 二日 郷土芸能奉演(一関 舞川鹿躍)
開山護摩供(開山堂)
郷土芸能奉演(江刺 行山流角
懸鹿躍/一関 市野々神楽)
- 三日 源義経公東下り行列(義経公
役 俳優清端淳平)
郷土芸能奉演(衣川 川西念佛
剣舞)
- 四日 古実式三番
能 「竹生島」
能 「佐渡狐」
郷土芸能奉演(胆沢 行山流都
鳥鹿踊/平泉 達谷窟毘沙門神楽
胆沢 朴ノ木沢念仏剣舞)
- 五日 古実式三番「開口」
能 「秀衡」
能 「仏師」
- 六日 山王講(山王堂)

- 十一日 祖師先徳鑽仰大法会総開闢
奉告法要(貫首 於延暦寺根本
中堂)
- 十二日 東日本大震災物故者追善回
向月命日法要(本堂)
- 十五日 伊藤豊吉様沈香木奉納(貫首
本堂)
- 十五日 ウェーサカ仏教会総会(法務
於一関)
- 十六日 松緑神道大和山初代教主田澤康
三郎師を偲ぶ会(貫首 於ホテ
ル貴森)
- 十九日 小石川ロータリークラブ様
十七名団参(貫首挨拶 本堂)
- 二十日 第十五回仙台青葉能(貫首 於
仙台電力ホール)
- 二十四日 お経を読む会(円乗院)
- 二十四日 臨濟宗妙心寺派一行来山
(東日本大震災回向法要)
- 二十六日 一山互助会委員会
- 二十九日 福聚教会丹波本部様四十名
団参(震災追悼法要 宏紹案内)

三十日 郡上市白鳥町石徹白大師堂を
参拝(貫首・澄元・澄円・晋照・
五大)

三十二日 天台宗務庁訪問(貫首・執事長)

◇六月

一日 月次大般若(本堂)

三日 「本堂法話」(七月二十九日ま
での毎週日曜日)



四日 伝教会(御影供 本堂)

五日 茨城法泉寺様二十九名団参
金色堂亀裂調査(澄元・秀厚・
章興・五大)

八日 東京豊山派布教研究所二十
一名団参

九日 最勝寺様檀家一行十六名団
参(貫首案内)

十日 法華経一日頓写経会(本堂)

十一日 東日本大震災物故者追善回
向月命日法要(本堂)

十六日 陸奥教区三部明光寺様十七名
団参(貫首挨拶)

二十日 自在房蓮光忌法要(本堂)

陸奥教区三部浄土寺様二十七
名団参(貫首挨拶)

二十九日 下仁田常住寺様来山(貫首 応接
貫首 法話(栃木教区寺庭婦人
会様三十四名 本堂)

◇七月

一日 月次大般若(本堂)

二日 北上川RCA理事会(貫首
於ペリーノH一関)

二日 開山堂お籠り(九月 結果、
開山堂)

四日 ウェーサカ式典(本堂)

郷土芸能奉演(天槌 城山虎舞)

五日 群馬県宗教団体連合会様四
十名団参(貫首挨拶 本堂)

八日 如法写経十種供養会(頓写経
奉納式)

十一日 東日本大震災物故者追善回
向月命日法要(本堂)

十五日 平泉総社神輿渡御



十六日 秘佛一字金輪仏頂尊開扉
法要

十七日 清衡公御月忌(胎曼供 本堂)

秘佛一字金輪仏頂尊御開帳
(十一月十一日 讚衡蔵特別収蔵室)

二十五日 貫首 講話(企業ネットワー
クいわて二〇二二in東京)

二十七日 五嶋みどり氏ヴァイオリン
奉納演奏(二十八日、本堂)

二十八日 貫首 講話(参与光中同行 於
多聞院伊澤家)

◇八月

一日 月次大般若(本堂)

四日 桜友会清掃奉仕

世界平和の祈り式典(貫首
於延暦寺)
十五時半(平和の鐘)打鐘

夏安居(十一月、結果、開山堂)

七日 東芝ライテック取締役社長渋谷
徹氏来山(貫首 応接)

十一日 東日本大震災物故者追善回
向月命日法要(本堂)

十二日 深川富岡八幡宮大祭(貫首)

十四日 第三十五回中尊寺新能

能 「養老」

狂言 「二人袴」
能 「誓願寺」

十六日 第四十八回平泉大文字送り火

十八日 富岡八幡宮連合会神酒開き
(貫首 於東京)

二十二日 岡崎市民生委員様三十五名
団参(貫首挨拶 本堂)

二十三日 施餓鬼会御逮夜(本堂)

二十四日 大施餓鬼会・放生会(本堂)
お経を読む会(貫首)

二十六日 讚衡蔵企画展「甦る平安の
輝き」(九月三十日)

三十日 大正大学古都仏教文化研修
一行四十七名来山(貫首挨拶・
澄照案内・邦世講話)

◇九月

一日 月次大般若(本堂)

二日 瀬見亀割観音祭礼
東北大学准教授横溝先生他七
名来山(貫首 茶室)

三陸郷土芸能奉演(山田町 八

幡大神楽)

三日 泰衡公御月忌(金曼供 本堂)
東京本所仏教会様六名来山
(貫首挨拶)

四日 復興祈願護摩供(十一月、貫
首・山僧侶 不動堂)

五日 群馬東漸寺様四十三名団参
(康純案内)

七日 平泉総社神輿会神酒開き
(貫首 於武蔵坊)

九日 三陸郷土芸能奉演(宮古市 鶴
住居虎舞)

十一日 東日本大震災物故者追善回
向月命日法要(本堂)

十七日 白符忌(本堂)

十九日 赤堂稻荷例祭(護摩供)

二十二日 貫首 講話(若手調停協会様
於盛岡グランドH)

金色堂LED点灯式 東芝
寄贈

二十二日 秋彼岸会法要(本堂)
お経を読む会(円乗院)

- 二十三日 三陸郷土芸能奉演(宮古市 夏屋鹿踊)
- 二十六日 『世界文化遺産 中尊寺と平泉の文化展』開催(貫首・澄元・章興 於熊本市鶴屋百貨店)
- 北原香菜子氏薩摩琵琶奉納演奏(本堂)
- 三十日 三陸郷土芸能奉演(宮古市 田代郷土芸能保存会)
- ◇十月
- 一日 月次大般若(本堂)
- 二日 慈眼会(本堂)
- 三日 サンマリノ共和国大使マンリオ・カデロ氏来山(貫首挨拶 本堂)
- 七日 三陸郷土芸能奉演(山田町 八幡鹿踊)
- 十一日 東日本大震災物故者追善回向月命日法要(本堂)
- 十三日 貫首 講話(二〇二二年度東北ブロック・ユネスコ活動研究岩手大会in平泉 於平泉小学校体育館)
- 二十九日 善光寺様四十五名団参(貫首挨拶 本堂)
- ◇十一月
- 一日 秋の藤原まつり開幕
藤原四代公追善法要
稚児行列
郷土芸能奉演(一関 行山流佛川鹿子躍)
- 二日 菊供養会(本堂)
お経を読む会(貫首)
市川仏教連合会様十五名団参(貫首挨拶)
- 郷土芸能奉演(江刺 行山流角懸鹿踊/一関 市野々神楽)
- 三日 中尊寺能「秀衡」、謡・仕舞(一関・平泉喜協会奉納 能舞台)
郷土芸能奉演(衣川 川西念佛剣舞/胆沢 行山流都鳥鹿踊/平泉 達谷窟毘沙門神楽)
- 七日 裏千家淡交会関根様・高野様・岩手支部様来山(貫首・執事長 応接)

- 十四日 茨城教区月山寺様・薬王寺様 計一〇名団参(月山寺・光榮純貴様、薬王寺・寂室純敬様)
- 三陸郷土芸能奉演(宮古市 江繋郷土芸能保存会)
- 十九日 村田林蔵氏来山(貫首 応接)
- 二十日 菊まつり開關法要
貫首 講話(東京墨田区保護師 会様三十一名 本堂)
- 二十一日 お経を読む会(常住ノ亮王)
- 三陸郷土芸能奉演(山田町 愛宕青年会八木節)
- 二十二日 貫首 講話(盛岡八幡宮様)
- 二十三日 貫首 講話(神社本庁清和会様 二十五名 かんざん亭)
- 北総教区東榮寺様二十五名 団参(宏紹案内)
- 豊山派仏教婦人会様三十六名 団参(貫首挨拶 本堂)
- 二十四日 群馬教区様八十五名団参(貫首挨拶 本堂)
- 八日 岩手県知事達増拓也氏来山(秘佛参拜 貫首案内)
- 十日 写経奉納式(本堂)
- 十一日 菊まつり表彰式(天広間)
東日本大震災物故者追善回向月命日法要(本堂)
秘佛一字金輪仏頂尊閉扉法要(特別収蔵室)
- 十二日 比叡山勝華寺様来山(貫首 応接)



中尊寺能「秀衡」

- 二十五日 横浜大聖院様十三名団参(貫首挨拶 本堂)
- 二十六日 貫首 講話(神社本庁清和会様 二十三名 かんざん亭)
- 貫首 日光訪問(二十七日、参与光中・秀厚同行)
- 二十八日 秀衡公御月忌(金曼供 本堂)
- 三陸郷土芸能奉演(大船渡市 菅生田植踊)
- 十六日 東芝本社金色堂LED寄贈 御礼訪問(貫首・澄円)
- 二十二日 文部科学省大学幹事研修会(貫首 於東京)
- 二十三日 天台会御速夜(結衆勤 本堂)
- 二十四日 天台会 御影供(本堂)
- 本堂御本尊抜魂法要



▽ 昨年は多くの時間を金輪様の御側で過ごさせていただき、その御縁に導かれ、多くの方々とのかけがえのない出会いがあり、たくさんのお思い出ができました。一心不乱に手を合わせられていた皆さんの御姿と、その隣でご説明をさせていただいた四ヵ月間に感じた事は、いつまでも心に残り続けると思います。

▽ 新御本尊の開眼は目前でございます。この歴史的な出来事を目の当たりにできる事を光榮に思っております。数百年、数千年後の御姿を目にすることは叶いませんが、時間を超えて手を合わせる誰かのため、真剣にお勤めをさせていただきます。

▽ 「関山植物誌」のナンバーを(4)とさせて頂いたいただきました。これは『関山』第三号で途絶えてしまっていた連載を再開しようとして決意した故でございます。

▽ 発行を年度末まで延引してしまいましたのは、私の勉強不足の致すところでございます。迅速な発行のため、努力致します。また、快く寄稿を引き受けてくださった皆様、そして関係者の皆様、前編集担当様、たいへんありがとうございます。

(破石晋照)

寺報「関山」は、中尊寺ホームページで閲覧が可能です。ぜひご利用下さい (<http://www.chusonji.or.jp/>)。

中尊寺(寺報)「関山」第十八号

平成二十五年(二〇三三)三月一日

発行 中尊寺

(執事長 菅野澄順)

〒〇三九一四一九五

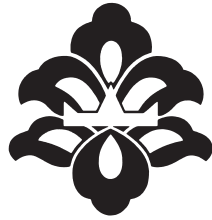
岩手県平泉町字衣関二〇二一

編集 中尊寺仏教文化研究所

印刷 川嶋印刷(株)



友好のエジプト蓮



〈発行 中尊寺〉